

# 前漢鏡の編年と様式

岡村 秀典

【要約】 漢鏡は、文様や銘文が変化に富むため、編年を研究する恰好の材料とされてきた。本稿では、前漢代の九つの鏡式それぞれについて新たに細かい型式分類を試みると同時に、これまで等閑になっていた鏡式間の併行関係についても、新しい方法から検討を加え、前漢鏡の体系的な編年を組立てた。この編年に基づいて前漢鏡を大きく四期に分け、第一期は戦国鏡の伝統をひいた蟠螭文鏡を中心とし、以下、第二期は植物文様からなる草葉文鏡、第三期は幾何学的文様を中心とする異体字銘帶鏡、第四期は写実的な動物文様を主体とする方格規矩四神鏡の出現が画期となるものと考えた。そして鏡式の構成や文様意匠が各時期に相違するだけでなく、銘文の表現する意味内容にも大きな変動がみられることを明らかにした。本稿は、このように文様や銘文の変化を総合的に把握することによって、前漢鏡を漢代文化史のなかに位置づけたものである。

史林 六七巻五号 一九八四年九月

## 一 はじめに

漢鏡は、文様や銘文が多様で時間の変化に敏感である。しかもそれが極めて広汎な地域に分布し、数多くの遺跡から大量に出土する。そのため、年代をはかる尺度として有効であり、製作地の中国のみならず、朝鮮や日本の考古学においても、遺跡の年代を決める材料として重視されている。

漢鏡の研究は、金石学の著しい発達をみた宋代以降、銘文を中心にすすめられたが、それを最初に考古学の方法を用いて編年をおこなったのは日本の研究者であった。なかでも富岡謙蔵<sup>①</sup>と梅原未治<sup>②</sup>の業績が大きい。富岡は、紀年鏡を広く求めてその紀年を正しく比定するとともに、銘文の内容や文様から各鏡式の年代観を組立てた。この仕事を継承した梅原は、

紀年鏡はもとより広く鏡を集成して鏡自体の研究をいっそう深化させ、編年の大枠をほぼ完成させた。

新中国の成立後、大規模な発掘調査が実施されるようになり、遺跡における共伴関係から鏡の年代を考えることが可能となった。一九五九年に公刊された『洛陽燒溝漢墓』<sup>③</sup>では、主に陶器の型式と組合せをもとに漢墓の時期区分をおこない、それとの対照から各鏡式の年代を決定している。この鏡編年では、前二世紀代の資料が乏しいけれども、多くの鏡式の年代的な位置づけが確かめられ、すでに四半世紀を経て膨大な資料の蓄積をみている今日でもなお、これを超える総合的な編年ではなく、内外の全面的な賛同を受けている。しかし問題点の一つとして、各鏡式の型式分類が不十分であることが指摘できる。富岡・梅原の研究についてもいえることであるが、ほとんどが文様構成のちがいによる鏡式の分類とその年代的な位置づけにとどまって、各鏡式の細かい型式変化が明らかにされず、編年としては大雑把すぎるくらいがある。また『洛陽燒溝漢墓』の場合、その編年が製作年代ではなく、使用年代を示すにすぎないことにも注意しておく必要がある。

『洛陽燒溝漢墓』以後、とりわけここ数年来、日本の研究者のなかに、厳密な基準を設定して鏡を細かく型式分類しようとする動きが強まっている。そのなかで樋口隆康は、あらゆる鏡を網羅して鏡自体の分析による厳密な型式分類をおこない、それによって鏡についての知識は以前に比べてずいぶん豊かになった。いっぽう個別の鏡式について、細かい編年を目的とした型式学的方法に基づく分析<sup>⑤</sup>が、最近になって提出され始めた。とはいえ、それは一つの鏡式の個別研究にすぎず、それを連ねていけば自然と漢鏡の体系的な編年ができあがるというものではない。漢代では異なる鏡式の鏡が同じ時期に併存していたのであるが、あらゆる鏡式の鏡を取扱った〈樋口古鏡〉においても、鏡式間の相互関係には言及されず、その意味で総合的、体系的な編年は、著しく立ち遅れているといわねばならない。そこで本稿は、型式学的方法を用いて、横の時間的關係にも注意した体系的な編年を組立てることを第一の目標とする。

漢鏡は年代をはかる尺度としての意義のみをもつものではない。その文様や図像は単なる裝飾の意味だけでなく、当代の觀念と密接に結びついているものであり、詩の形態をなした銘文は、人間の欲望、悲哀、快樂などさまざまな感情を吐

露している。このように漢鏡は当時の世界観や情感を表現しているのであるから、それを年代上に適切に位置づけることができるならば、思想史や文学史などの分野での役割も決して小さくなく、文献では知ることのできない事実をひきだすことすら可能であるかもしれない。ことに人々の生活用品として日常的に鏡が用いられたのであるなら、鏡と社会の意識との関わりにははかり知れない深いものがあろう。

従来、文様や銘文の分析と、鏡自体の編年とが全く別々の立場からおこなわれ、総合的な理解を欠いていた。本稿は、新しく組立てた体系的な編年を基礎に、文様や銘文について初步的な考察をおこない、漢鏡を文化史上に意味づけることを第二の目的とする。なお紙面の都合上、本稿は前漢鏡のみを対象とし、後漢鏡については稿を改めることにする。

- ① 富岡謙哉『古鏡の研究』(京都、一九二〇年)。
- ② 梅原未治『鑑鏡の研究』(京都、一九二五年)。
- ③ 中国科学院考古研究所編『洛陽燒溝漢墓』(中国田野考古報告集)。
- ④ 樋口隆康『古鏡』(東京、一九七九年)。以下、(樋口古鏡)と略す。
- ⑤ 文様の型式系列(組列)を明示した型式学的研究方法による論文に、西村俊範「双頭龍文鏡(位至三公鏡)の系譜」(『史林』第六六卷第一号、一九八三年)がある。

## 二 編年の方法

漢鏡は、鈕座、主文、乳、周縁などの部分から構成され、各部分には相互に独立した文様がほどこされる。これを単位文様と呼ぶ。この一面の鏡における単位文様の相関関係をもとに一つの鏡式の型式分類をおこなうが、銘文の種類やその字体、周縁の断面形などの要素も、単位文様と同様に取扱うことにする。もしある単位文様に一連の変化を示す系列が認められるならば、それによって型式変化の方向を決定することができる。このようにして一つの鏡式の編年が完成する。

単位文様は相互に独立しているために、その多くは一つの鏡式に固有のものではなく、異なる鏡式にもあらわれる。もしある共通する単位文様の時期が限られるならば、それを介して互いの鏡式の編年を結びつけることができる。共通する単位文様が多ければそれだけ併行関係は確実性を増し、この操作を繋いでいくことによって漢鏡全般にわたる系統的な編

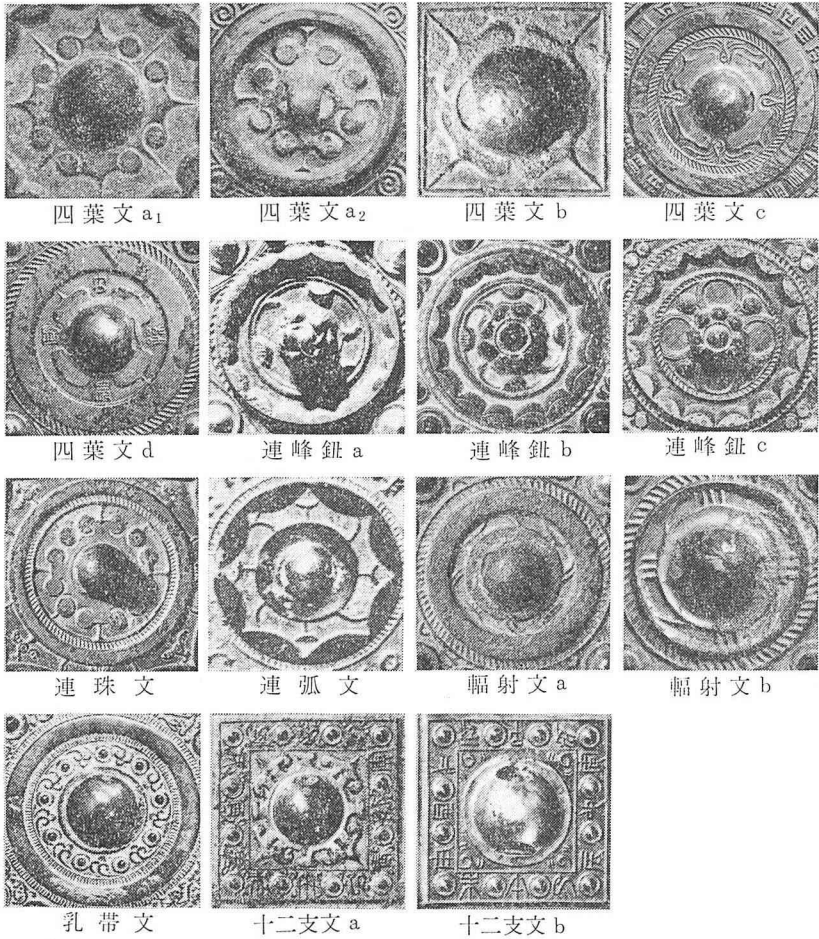


図1 鈕・鈕座文様

年を組立てることができるのである。

そこでまず、いくつかの鏡式に共通してみられる代表的な単位文様を分類しておくことにしよう。そのなかには、系列の確かめうる文様も少なくない。

鈕・鈕座(図二) 鈕には、三弦鈕、獸鈕、連峰鈕、半球鈕がある。三弦鈕の鈕座文様には、七面圈帯、銘帯をもつもの、龍文などがある。連峰鈕は、鈕の中心とその周囲の六個の山すべてに渦が巻上がる表現をほどこし、鈕座に弧線と半円形の突出を三単位もつ連峰鈕 a、鈕の中心の山が大きい

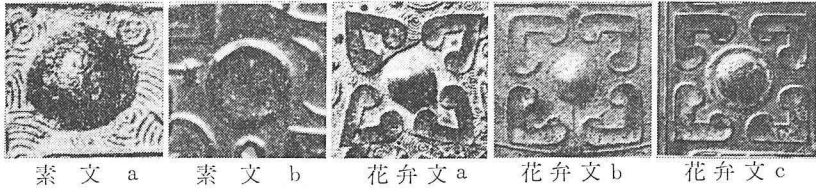


図2 乳文様

い乳に変形して周囲が八個の山に増加し、鈕座の文様が四単位に増加した連峰鈕b、鈕座の弧線が増えて乳状の渦文などが付加された連峰鈕c、の三種に分ける。半球鈕の鈕座文様は多様である。まず四葉文は、葉の両端が内側に巻きこむ四葉文a<sub>1</sub>、葉の両端が独立して珠文状になった四葉文a<sub>2</sub>、葉の両端が巻きこまない四葉文b、葉の間に細線で子葉をいれる四葉文c、葉の間に銘文をいれる四葉文dに分ける。連珠文は、鈕座の周囲に十二個の珠文を入れたもの。放射文は、幅広い圏帯をもつ放射文a、線圏となる放射文bに分ける。連弧文は、連弧文圏の内側に弧線や直線をほどこしている。この弧線や直線は、連珠文や放射文のものとも共通し、連峰鈕の鈕座文様に由来するものと考えられる。乳帯文は、鈕の周囲に小さい乳をめぐらし、その間に唐草文や銘文をいれたもの。十二支文は、十二支の銘文をめぐらした方格の内側に子葉のある四葉文をいれた十二支文aと、素文となる十二支文bとに分ける。

乳(図二) 素文、円座、四弁文、四葉文、放射文、連弧文などがある。素文は、半球形の乳となる素文aと、白形の素文bとに分ける。四弁文は、素文a乳の周りにV字形の花弁をもつ四弁文a、その花弁がL字形になった四弁文b、円座乳にL字形の花弁をもつ四弁文cに分ける。四葉文の細分は鈕座と同様におこない、四葉文a<sub>1</sub>・a<sub>2</sub>・bの三種を設定する。

銘文 銘文の字句自体については、樋口隆康によって出現頻度の高い銘文が抽出、分類され、また句切れや脱字の校定を経てもとの形が復原されている<sup>①</sup>。非常によく整理された分類だと思うので、若干の改変を加えるだけで、ほとんどそのまま利用させていただく<sup>②</sup>。

- A<sub>1</sub> 脩相思 毋相忘 常樂未央  
A<sub>2</sub> 長相思 毋相忘 常貴富 樂未央

- B<sub>1</sub> 大樂貴富 得長孫 千秋萬歲 延年益壽
- B<sub>2</sub> 大樂貴富 千秋萬歲 宜酒食
- C<sub>1</sub> 見日之光 天下大明
- C<sub>2</sub> 見日之光 長毋相忘
- C<sub>3</sub> 久不相見 長毋相忘
- D 潔精白而事君 愆陰驩之奔明 煥玄錫之流沢 恐疎遠而日忘 懷靡美之窮嘔 外承驩之可說 慕嫫姚而靈泉 願永思而毋絶
- E 内清質以昭明 光輝象夫日月 心忽揚而願忠 然壅塞而不泄
- F<sub>1</sub> 日有熹 宜酒食 長貴富 樂母事
- F<sub>2</sub> 日有熹月有富 樂母事宜酒食 居必安無憂患 竽瑟侍心志驩 樂已茂固常然
- F<sub>3</sub> 日有熹月有富 樂母事常得意 美人会竽瑟侍 商市程万物平 老復丁死復生 醉不知醒且星
- G 清泚銅華以為鏡 昭察衣服觀容貌 糸組雜選以為信 清光平成宜佳人
- H 潔治鉛華清而明 以之為鏡宜文章 延年益壽辟不祥 与天無亟而日月光 千秋萬歲長樂未央
- I 上太山見神人 食玉英飲澧泉 駕交龍乘浮雲 白虎引直上天 宜官秩保子孫
- K 尚方作寬真大巧 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食粟 浮游天下敖四海 徘徊神山采芝草 寿如金石為國保
- L 尚方作寬大(真)毋傷 巧工刻之成文章 左龍右虎辟不祥 朱鳥玄武順陰陽 子孫備具居中央 長保二親樂富昌 寿敵金石如
- 侯王
- M 漢(新)有善銅出丹陽 和以銀錫清且明 左龍右虎掌四彭 朱爵玄武順陰陽 八子九孫治中央
- N 王氏作寬四夷服 多賀新家人民息 胡虜殄滅天下復 風雨時節五穀熟 長保二親得天力 官位尊顯蒙祿食 伝告后世樂無極
- O 黍言之始有紀 潔治錫銅去異宰 辟除不羊宜古市 長保二親利孫子

鏡の銘文はすべて陽鑄で表現され、その字体には一連の変化があらわれている(図三)。字体aは、やわらかい丸味を帯



図3 銘文の字体

びた典型的な小篆体である。字体bは、全体が方形に近づいて堅さがあらわれ、字体cでは、完全に方整な角張った字体となっている。字体dの筆線は同様に直線を主体とするが、ややくずれて鋭利な工具でぞんざいに引っ掻いたようであり、それが少しずつ丸味を帯びて字体eとなり、字体fではなめらかな曲線を多用するにいたっている。字体gでは、筆線が鋭く突出するとともに堅さがみられる。その筆端が三角錐状であることから、楔形体とも呼ばれる。筆端の楔形を残すが、全体に角張って方形に近づいたものを字体hとし、全体が完全な正方形を呈したものを字体iとする。字体

i はゴシック体とも呼ばれる。字体 g—i は筆線が鋭く突出するのに対し、字体 j はその突出がにぶく、全体の形が方整であるにもかかわらず、やわらかい字体となっている。字体 k は、細い線で縦長に表現され、曲線を多用した小篆体の風格を保った字体である。縦画をわざと曲げたり、長くはらったりする特徴がみられる。同様に細線で表現されるが、筆線の丸味を失ない、全体がこじんまりとした正方体のものを字体 l とする。これは一種の隸体である。

銘文の字体の変化は、全体としてみれば篆体から隸体への変化として把握できるが、それが実用的、記録的性格をもつものでないため、簡牘文字や刻銘と異なって、独自の变化をたどっている。その推移のなかで、字体 j と k とが直接連続するものでないことを除けば、ほぼ連続的な変化を示すものと考えられ、編年をおこなう上で重要な指標となるであろう。

① 樋口隆康「中国古鏡銘の類別的研究」(『東方学』第七輯、一九五三年、『展望』東アジアの考古学、東京、一九八三年に再録)。

銘文 j は例が少ないため割愛し、銘文 P 以下は前漢鏡にない銘文であるから省略した。

② 樋口分類の銘文 A・B・C・F について改変した。また樋口分類の

### 三 蟠螭文鏡類と草葉文鏡

ここに蟠螭文鏡類というのは、龍をモチーフとする一群の鏡で、蟠螭文鏡、渦状虺文鏡、螭龍文鏡を含む。そのなかで蟠螭文鏡と渦状虺文鏡とは、三弦鈕、匕面縁、地文と主文の重ね合わせをもつ戦国鏡の伝統を保った鏡である。これに対して草葉文鏡は、植物文様をモチーフとし、戦国鏡の名残りをほとんどとめない鏡である。一見相對立するこうした鏡が、実は相互に単位文様を共有して関連し合っていることを明らかにし、それによって相對編年を組立てていくことが本章の目的である。

#### 1 蟠螭文鏡

細長い帯状となった龍の体軀が連鎖する渦状に表現された蟠螭文を主文とする鏡である。三弦鈕、匕面縁をもち、地文



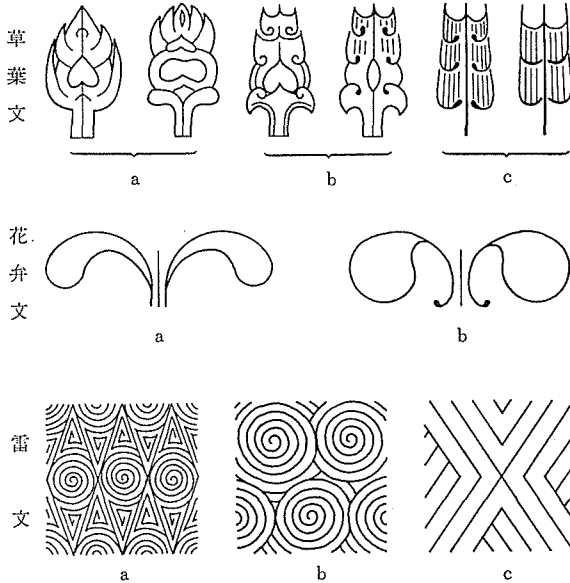


図4 草葉文・花卉文・雷文

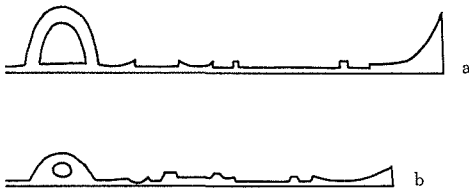


図5 七面縁断面 (縮尺1/1)

の上に主文を重ね合わせている。匕面縁は縁端が高く鋭い匕面縁 a (図五) で、地文は斜格子状の雷文 a (図四) をほどこしている。

分類に関して、カールグレンは文様のさまざまな特徴をとらえて E 類と F 類の二つに大別し、E 類を前三世紀、F 類を前二世紀に比定した<sup>①</sup>。いっぽう〈樋口古鏡〉は主文表現を基準に、平形式と双線式とに分類した。平形式はカールグレンの E 類を中心として一部 F 類に包括される。両氏の分類は大局において当を得ていると考えられるが、〈樋口古鏡〉にいう双線式を二つに細分し、平彫表現 (図六一) の体軀中央に一条の沈線が走り、平行する二条の帯のようにみえる双線 a (図六一) と、体軀が二、三条の高い突線表現となった双線 b (図六一) とに分ける<sup>②</sup>。

主文の文様構成は、蟠螭文だけからなるもの以外に、蟠螭文の間に禽鳥文を配するもの、草葉文を配するもの、蟠螭文と I L V 形の規矩文とをもつものが区別され、便宜上、それぞれを蟠螭禽鳥文鏡、蟠螭草葉文鏡、蟠螭規矩文鏡と仮称する。そのなかの蟠螭草葉文鏡に用いられた草葉文には、一連の系列を確かめることができる (図四)。すなわち、蕾形

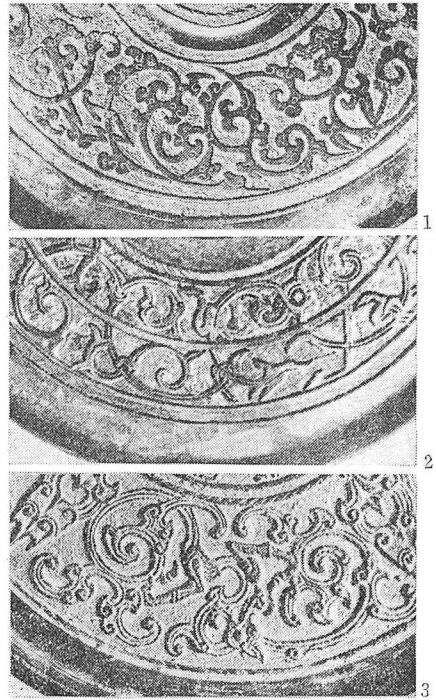


図6 蟠螭文の表現

体aによる銘文A<sub>1</sub>などをもつ例がある。蟠螭草葉文鏡は、Ⅰ式と同様に草葉文aをほどこす。鈕座の匕面圏帯の内側や内区最外周に繩状突帯をもつものがある。

蟠螭文鏡Ⅲ式(図七―3・4) 主文表現が双線bによるものである。蟠螭草葉文鏡と蟠螭規矩文鏡との二種類が存在する。いずれの鈕座も龍文をほどこし、そこに銘文をいれることが多い。蟠螭草葉文鏡の場合、草葉文bに交替し、銘文は字体aかbによる銘文B<sub>2</sub>を鈕座の円圏にいれるほか、まれに字体bによる銘文D・Eを鈕座と内区最外周とにいれる。蟠螭規矩文鏡の場合は、字体bによる銘文B<sub>1</sub>を鈕座の方格辺にいれる。蟠螭文鏡Ⅱ式と同様、鈕座や内区最外周に繩状突帯をめぐらしたものが多い。

以上のように蟠螭文鏡を主文表現を基準に三型式に分類したが、銘文はⅡ式に出現してⅢ式にはかなり普遍化し、草葉文はⅠ・Ⅱ式の草葉文aからⅢ式には草葉文bへと変化していることが明らかとなった。

の草葉文aから、そこに麦穂状の芽が成長してきた草葉文b、最後に麦穂状の部分だけになった草葉文cへとという展開が跡づけられる。<sup>③</sup>

さて、蟠螭文鏡の型式分類にあたっては、主文表現を基準に、次の三型式に分ける。

蟠螭文鏡Ⅰ式(図七―1) 主文が平彫表現によるものである。蟠螭禽鳥文鏡や草葉文aを用いた蟠螭草葉文鏡も存在する。

蟠螭文鏡Ⅱ式(図七―2) 主文表現が双線aによるものである。蟠螭禽鳥文鏡には、鈕座に字

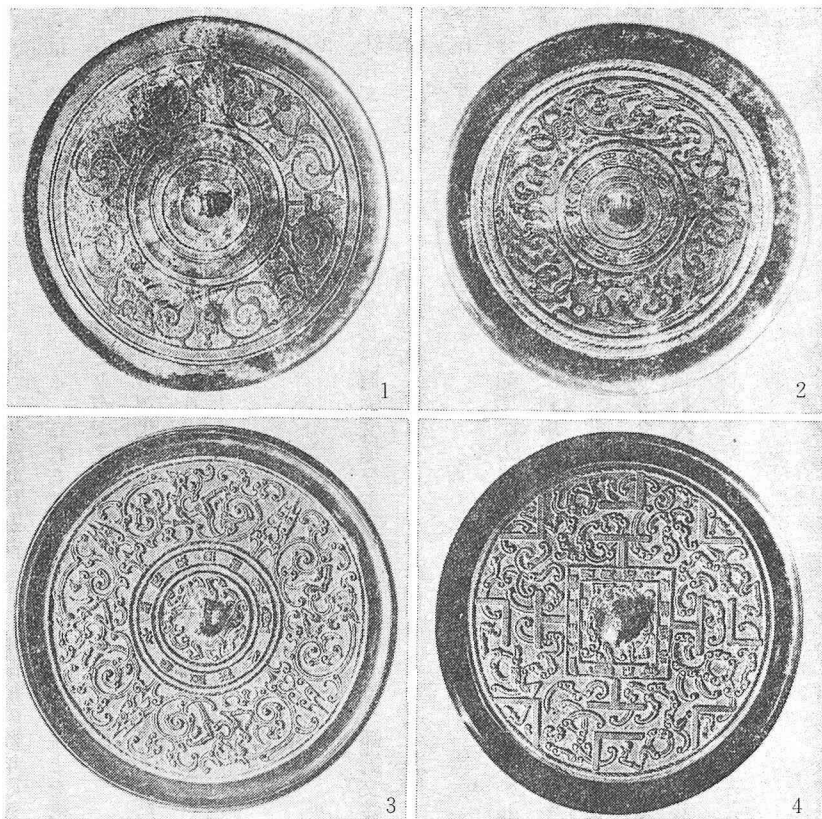


図7 蟠螭文鏡 (1: I式 径 20.6cm, 2: II式 径 14.2cm, 3: III式 径不詳, 4: III式 径 18.8cm)

蟠螭文鏡の出現年代は、I式を出土した湖北雲夢睡虎地十一号墓が、副葬の簡牘から前二一七年に埋葬されたと考えられること<sup>④</sup>によって、戦国時代にさかのぼることがわかる。

蟠螭文鏡II式の年代については、まずその銘文A<sub>1</sub>に注意したい。本来「長相思」といふべきところを、長の字を諱んで「脩相思」と改めていることから、淮河南岸の寿春に封ぜられた淮南王安が父の名を諱んだものであり、その在位した前一六四—一二二年のなかに製作年代が比定されている<sup>⑤</sup>。この説に従う。

遺跡出土例をみると、蟠螭文鏡I式とII式とが共存している安徽阜陽双古堆二号墓は、「十一年女陰侯」銘の漆器を伴ない、報告者はこの紀年を前一六九年に比定し、墓の年代

を文・景帝の頃と考えている<sup>⑥</sup>。また、埋葬年代が前一六八年以後の数年のうちに比定されている湖南長沙馬王堆一号墓からは、蟠螭文鏡Ⅱ式が出土している<sup>⑦</sup>。これら遺跡出土例と銘文の考証とを考え合わせると、蟠螭文鏡Ⅱ式の年代は、前一七〇—一五〇年代に位置づけることができるだろう。

蟠螭文鏡Ⅲ式は、これに後続する年代が考えられる。この型式を出土した河北滿城二号墓は、埋葬年代が前一八一—〇四年のなかに比定でき、<sup>⑧</sup>蟠螭文鏡Ⅲ式の使用年代の一点を示している。その製作年代を限定するには、次の草葉文鏡の編年と対照する必要がある。

## 2 草葉文鏡

花卉文、花蕾文、草葉文などの植物文様を主文とする鏡である。蟠螭文鏡に存在した地文をもたず、三弦鈕が獸鈕ないしは半球鈕に、匕面縁が連弧文縁に変化するなど、草葉文鏡の変遷の過程で戦国鏡からの伝統的要素が消失し、漢鏡として確立する画期的な意義がある。

分類に関して、〈樋口古鏡〉は鈕座が方格のものと円圈のものに大別した。しかしそれ自体は系列を示すものではないため、この分類をそのまま編年に利用することはできない。草葉文鏡の多様な単位文様を分析すると、鈕・鈕座、花卉文、草葉文、乳、周縁、銘文において変化が確かめられる。そこでまず主文の一つである花卉文に着目し(図四)、細長く垂れる花卉文aをもつものを草葉文鏡Ⅰ式、丸くおさまる花卉文bをもつものを草葉文鏡Ⅱ式とする。Ⅰ式の鈕・鈕座には三弦鈕、獸鈕、四葉文a<sub>1</sub>があり、Ⅱ式にはそれに加えて四葉文bが存在する。この四葉文bは四葉文a<sub>1</sub>から変化してきた文様と考えられるから、四葉文b鈕座のものを草葉文鏡Ⅱ式とし、Ⅰ式と同様に三弦鈕、獸鈕、四葉文a<sub>1</sub>をもつものを草葉文鏡Ⅰ式とする。各型式のほかの特徴は次の通りである。

草葉文鏡Ⅰ式(図八一)

草葉文bをほどこすが、草葉文をもたない例も少なくない。乳には四弁文a・b、四葉文

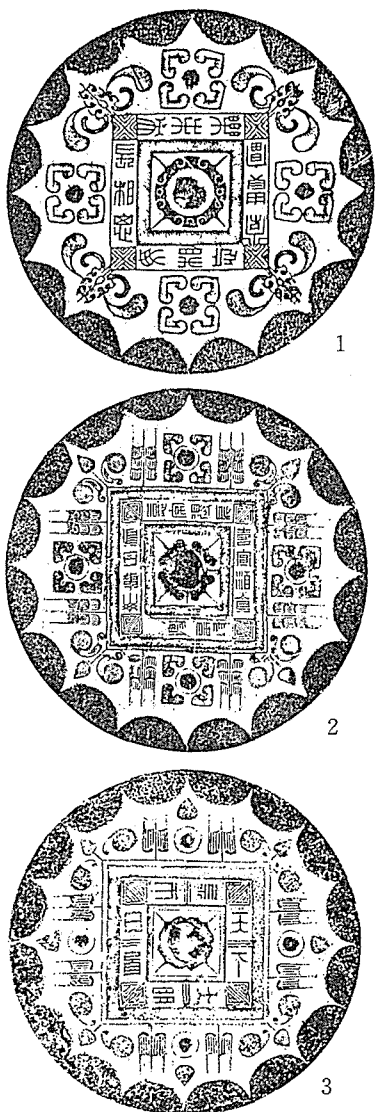


図8 草葉文鏡 (1: I式 径 16cm,  
2: II A式 径 20.7cm, 3: II B式  
径 14.0cm)

$a_1$  などがある。周縁には高さの低い $b$  (図五) のほかに、連弧文縁も出現している。銘文は、銘文 $A_2$  のほか、四言四句の吉祥句をいれ、字体は $b$  の段階である。面径は一一—二二cm とばらつきが大きい。

草葉文鏡 II 式 (図八一②) 草葉文 $b$  から草葉文 $c$  に交替し、またそれが普遍的に存在して、草葉文鏡の重要な要素となる。乳には素文 $a$ 、四弁文 $b$  のほか、新たに四弁文 $c$ 、円座が出現する。周縁はほぼ連弧文縁に限る。銘文は、字体 $c$  が多くなり、四言の吉祥句をいれるが、二、三句の短銘となる。また三言の銘文 $F_1$  が出現する。面径は九—二二cm とばらつきが大きい。

草葉文鏡 II 式 (図八一③) 草葉文 $c$  が普遍的に存在する。乳は円座が多くなり、素文 $a$  がわずかに存在している。銘文は、四言二句の銘文 $C_1$ ・ $C_2$  が主となるほか、銘文 $F_1$  が存続している。字体 $c$  を用いる。面径は九—一四cm と、大型の例がみられなくなる。

以上、花卉文と鈕・鈕座に基づいて草葉文鏡を三型式に分類したが、草葉文、乳、銘文、面径などにも併行する一連の

変化を確かめることができた。<sup>⑩</sup>

次に草葉文鏡と蟠螭文鏡との相對編年を、單位文様の共有關係によって分析してみよう。まず草葉文に着目すると、草葉文 a は蟠螭文鏡Ⅰ・Ⅱ式に存在し、草葉文 b は蟠螭文鏡Ⅲ式と草葉文鏡Ⅰ式とに、草葉文 c は草葉文鏡Ⅱ式に存在した。草葉文 a—c を連続的な変化と認めるならば、蟠螭文鏡Ⅲ式と草葉文鏡Ⅰ式とに共通する草葉文 b は型式の限定しうる有効な單位文様とみることができ、これによってその併行關係がかなりの確かさをもって暗示される。銘文の字体もまた系列をたどりうるものであるが、字体 a が蟠螭文鏡Ⅱ・Ⅲ式に、字体 b が蟠螭文鏡Ⅲ式と草葉文鏡Ⅰ式に、字体 c が草葉文鏡Ⅱ式にあらわれている。このように字体からみても同じ結果が得られ、蟠螭文鏡Ⅲ式と草葉文鏡Ⅰ式とが時期の上で重なり合うことはほぼ確實といえるだろう。

文様の分析から蟠螭文鏡と草葉文鏡との併行關係を明らかにしたのであるが、絶対年代の上でもそれを裏付けることができる。草葉文鏡各型式の絶対年代を遺跡で共伴している銅銭によって検討すると、草葉文鏡Ⅰ式の場合、共伴關係が報告されている四例<sup>⑪</sup>すべてが半両銭だけである。Ⅱ式の場合では、五例のうち一例<sup>⑫</sup>が半両銭のみ、三例<sup>⑬</sup>が半両銭と五銖銭とを伴ない、残る一例<sup>⑭</sup>が五銖銭だけである。Ⅱ式の場合は、六例のうち半両銭だけが二例<sup>⑮</sup>、残る四例<sup>⑯</sup>が五銖銭とだけ共伴している。五銖銭の鑄造は前一一八年に始まるから、五銖銭が出土する墓の年代は当然それ以降であり、半両銭と五銖銭とが共存している墓は前一一八年からあまり隔たらない年代を考えることができる。ちなみに草葉文鏡Ⅱ式<sup>A</sup>が出土し、半両銭と五銖銭とが共存していた河北滿城一号墓は、前一一三年に没した中山王勝の墓とされ、<sup>⑰</sup>鏡と銅銭の使用年代の一点を示している。このようにして草葉文鏡各型式の使用年代について一応の目安が与えられ、その製作年代については、Ⅰ式を前一五〇—一三〇年代、Ⅱ式を前一三〇—一〇〇年代に求めるのが妥当であろう。とすれば、蟠螭文鏡と草葉文鏡とがそれぞれに比定した実年代の上でも前後に矛盾することなく繋がることになり、前二世紀代の編年の軸は一応組立てられたとみてよいだろう。

## 3 渦状虺文鏡

渦状虺文鏡は、蟠螭文鏡の主要な要素である三弦鈕、地文と主文の重ね合わせ、 $\perp$ 面縁をそなえるが、主文は蟠螭文が著しく簡略化した渦状となること、地文が粗線化し、単なる渦文(雷文b)ないしは平行線文(雷文c)となること(図四)、縁部の高さが減じて鋭さを失なった $\perp$ 面縁bとなること(図五)など、蟠螭文鏡からかなり退化した特徴をもっている。主文表現は双線bの範疇にはいり、面径は一〇cm前後と小型である。カールグレンのJ類に相当する鏡式である。

型式分類に関して、〈樋口古鏡〉は主文を連環式と分離式に分けた。主文のこのちがいは形の上で明確な差としてあらわれているが、一連の系列を示すものではない。そこで本稿では地文に着目し、雷文bをもつものをⅠ式、雷文cをもつものをⅡ式とする。雷文bからcへの変化を重視するわけである。

渦状虺文鏡Ⅰ式(図九-1・2) 主文が連環状のものには、龍の頭が明瞭で体軀が複雑に渦巻くものから、頭が消えて体軀が単純な糸巻形になったものまであり、鈕座は円圈である。主文が分離しているものは、明瞭な龍頭をもって体軀がやや複雑なものと、C字形を三つ連ねただけの簡単なものがあり、鈕座は円圈と方格との兩種が存在する。乳をもつ場合は、素文a、四弁文a・bを四個配置し、それを繋ぐ $\perp$ 面圈帯をほどこす例がある。方格鈕座の例には、字体cによる銘文A<sub>1</sub>や銘文C<sub>1</sub>をいれる。草葉文cをもつ例が存在する。<sup>⑧</sup>

渦状虺文鏡Ⅱ式(図九-3) 主文が連環状のものは、龍の頭がなく、体が簡単な糸巻状を呈す。主文が分離したものは、C字形を三つ連ねただけ、ないしはS字形にくずれる。鈕座には円圈と方格との兩種があり、方格鈕座には「常楽未央 長毋相忘」や銘文Cなど四言二句の短銘をいれる。乳は素文aのみとなる。面径は一〇cm未満と小さい。

渦状虺文鏡の編年は地文の雷文によって設定したⅠ・Ⅱ式が基礎になるが、同時に主文が簡略化し、面径が縮小していく過程が判明した。この鏡は最初に述べた点から蟠螭文鏡の系譜をひき、それに後出することは明らかである。したがっ

て時期の上で草葉文鏡に併行すると推測されるが、単位文様の上ではいかなる脈絡をもつものであろうか。

草葉文鏡Ⅱ式に普遍的に用いられた草葉文cは、いくつかの渦状虺文鏡Ⅰ式にも存在した。乳では、素文a、四弁文a・bが共通してあらわれ、なかでも四弁文a・bは草葉文鏡Ⅰ・Ⅱ式と渦状虺文鏡Ⅰ式とに限定される。銘文をみると、字體cと銘文Cが草葉文鏡Ⅱ式と渦状虺文鏡Ⅰ・Ⅱ式とに共通する。このように草葉文鏡と渦状虺文鏡との間には密接な單位文様の共有関係が認められ、それによって草葉文鏡Ⅱ式<sup>A</sup>と渦状虺文鏡Ⅰ式、草葉文鏡Ⅱ式<sup>B</sup>と渦状虺文鏡Ⅱ式が併行するものと判断できる。

#### 4 螭龍文鏡と星雲文鏡

螭龍文鏡の主文は、頭、足、尾など各部が写実的な表現となり、口を大きく開け、細長い胴、トカゲのような長い尾をたくみにくねらせる姿は実に躍動的である。眼、肩は乳状に突出し、細い体軀は三角形の突線となっている。龍をモチーフとする点で蟠螭文鏡の系統に属すが、一般に地文がないこと、周縁が連弧文縁となることのほか、鈕座、乳の文様などに草葉文鏡との共通点が多い。

螭龍文鏡の型式分類においては、草葉文鏡の分類基準を参考に、獸鈕または四葉文a<sub>1</sub>鈕座のものをⅠ式、四葉文b鈕座のものをⅡ式(図九-4)とする。螭龍文鏡の鈕にはほかに連峰鈕があり、草葉文鏡には存在しないために位置づけが難しいけれども、新しく出現したものとみなし、Ⅱ式に含める。

星雲文鏡は、数個の乳状になった突起を曲線で繋いだ主文をもった鏡である。主文について梅原末治や〈樋口古鏡〉は、螭龍文鏡の螭龍文にみられた乳状の眼や肩が星雲文の乳状突起となり、体軀がその曲線となったと考えた。確かに鈕座、周縁や文様構成をとってみても螭龍文鏡と星雲文鏡とは非常に類似しており、この推測は妥当なように思われる。とはいえず星雲文を仔細に観察すると、その乳状突起には渦状に巻上げた文様がほどこされて、流れるような曲線と一連の雲の渦



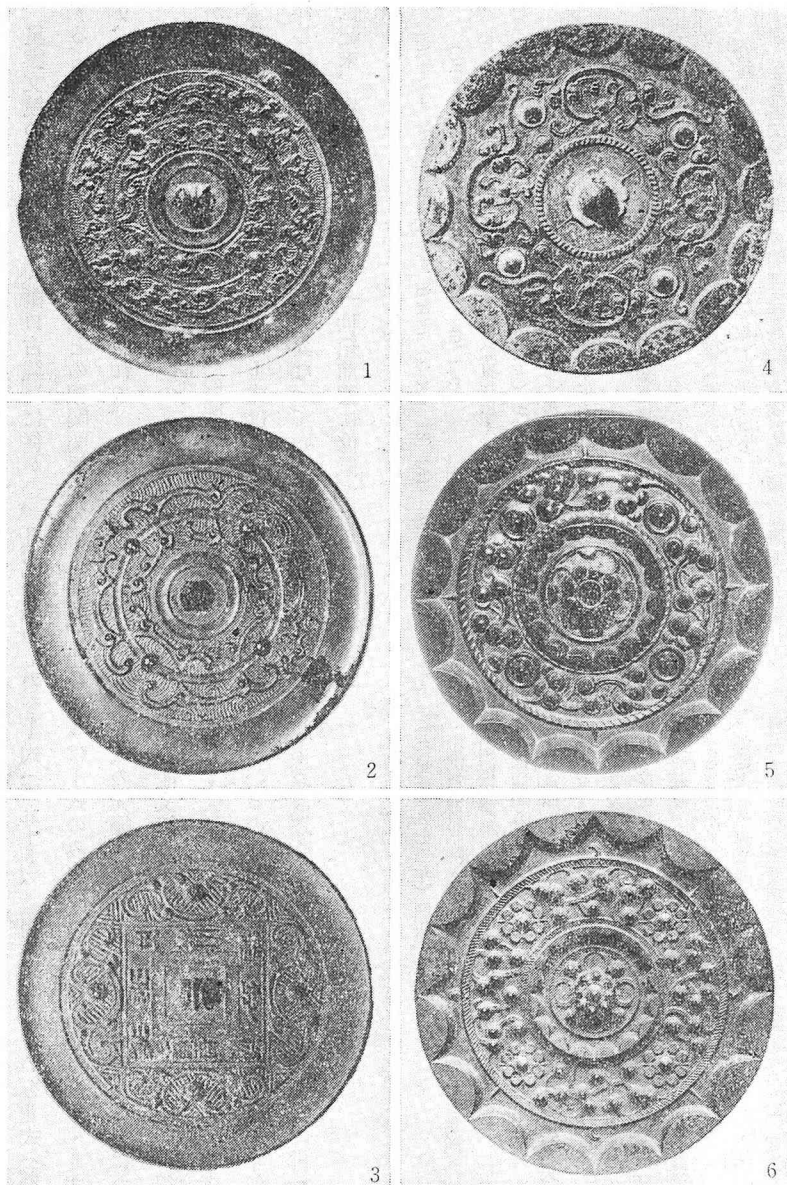


図9 渦状虺文鏡 (1: I式 径 9.9cm, 2: I式 径 10.2cm, 3: II式 径 8.7cm), 螭龍文鏡 (4: II式 径 13.6cm), 星雲文鏡 (5: I式 径 13.3cm, 6: II式 径 15.3cm)

のようにみえ、もはや全体が雲気文様に変形している。

星雲文鏡の型式分類は〈樋口古鏡〉に従がい、乳が円座のものをⅠ式(図九-5)、四葉文 $a_2$ のものをⅡ式(図九-6)とする。この型式と連峰鈕の系列との相関関係を分析すると、連峰鈕 $a$ はⅠ式のみに限られ、連峰鈕 $b$ はⅠ・Ⅱ式にまたがり、連峰鈕 $c$ はⅡ式のみ認められる。これによって星雲文鏡Ⅰ・Ⅱ式の先後関係は一つの傍証を得たことになろう。

星雲文鏡は前述のように螭龍文鏡の系譜をひき、連峰鈕からみても螭龍文鏡Ⅱ式よりさかのぼることはあり得ない。しかしそれ以上の相對編年は、時期の限定しうる単位文様の共有関係を欠くため、遺跡における共伴関係を参考にした(表一)。これをみると、星雲文鏡Ⅰ式は草葉文鏡や螭龍文鏡と共伴しているのに対し、星雲文鏡Ⅱ式は異体字銘帶鏡と共伴しており、その鏡式と時期が異なっている。このことから星雲文鏡Ⅰ式は遅く見積っても草葉文鏡 $B$ 式に併行する前二世紀末、星雲文鏡Ⅱ式は前一世紀前葉に位置づけられると考える。

- ① B. Karlgren, Hsui and Han, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* (abbr. *BMEFA*), No. 13, 1941; idem, *Early Chinese Mirrors*, *BMEFA*, No. 40, 1968.
- ② 平彫表現のなかで、体軀の幅が影絵風に広く、やや写実的なものがある(たとえばカールグレンE五など)が、これは螭龍文ではなくて夔鳳文の一種であり、本稿では除外して扱っている。
- ③ 同様の指摘はカールグレンが最初におこなった(注① *BMEFA*, No. 13, p. 100)。
- ④ 雲夢睡虎地秦墓編写組『雲夢睡虎地秦墓』(北京、一九八一年) 図版三〇—二。
- ⑤ 高去尋「評漢以前の古鏡の研究並論「准式」之時代問題」(《歴史語言研究所集刊》一四本、一九四一年) 一—一九頁。
- ⑥ 安徽省文物工作队・阜陽地区博物館・阜陽県文化局「阜陽双古堆西漢汝陰侯墓發掘簡報」(《文物》一九七八年第八期)。
- ⑦ 湖南省博物館・中国社会科学院考古研究所編『長沙馬王堆一号漢墓』(北京、一九七三年) 図版一七八。
- ⑧ 中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理处『滿城漢墓發掘報告』(《中国田野考古報告集》考古学專刊丁種第二〇号、北京、一九八〇年) 図版一八一—二。
- ⑨ 与天無極 与天相長、服者君卿、所言必当、長策未央などの四言句を組合せていれている。
- ⑩ 草葉文鏡のなかに花卉文がなく、草葉文だけで正文を構成するものが若干存在し、この型式分類からはみ出ている。これについては、草葉文や鈕座、銘文など別の単位文様の分析から以上の型式分類に適合させる必要がある。
- ⑪ 山西太原東大堡墓(《文物》一九六二年第四・五期)、河南洛陽八三号墓(洛陽市文物管理委员会編『洛陽出土古鏡』、北京、一九五九年、図版二)、四川成都羊子山一五七号墓、同一六一号墓(四川省博物館・

重慶市博物館編『四川省出土銅鏡』、北京、一九六〇年、図版一三・二〇。以下、『四川省出土銅鏡』を〈四川〉と略す。

⑫ 四川成都羊子山二三五号墓〈四川〉図版一八。

⑬ 河北滿城一号墓(中国社会科学院考古研究所ほか注⑧)、四川成都羊子山一七七号墓(四川)図版一四)、四川大邑敦義(『文物』一九八一年第一期)。

⑭ 四川成都羊子山二〇〇号墓(四川)図版一五)。

⑮ 山東臨沂銀雀山二号墓(『文物』一九七四年第二期)、四川成都羊子山一六九号墓(四川)図版一九)。

#### 四 異体字銘帶鏡

銘文が主たる文様となり、その字体が意匠化した特色ある一群の鏡を異体字銘帶鏡と呼ぶ。これまで銘文のなかの文字をとって「精白鏡」や「昭明鏡」などと呼ばれ、細分されてきたが、〈樋口古鏡〉は文様構成を重視して、連弧文銘帶式、重圏単銘帶式、単圏銘帶式、重圏双銘帶式に分けた。いずれも分類案としては承認できるけれども、細かい編年をおこなうには別の観点が必要である。

異体字銘帶鏡は、鈕座、銘帶、周縁から構成され、鈕座と銘帶との間に連弧文帯がはいる構成をとることも少なくない。一般に周縁が素文となるため、単位文様の変化が認められるのは鈕座と銘文しかなく、そのなかで銘文の字体の変化が最も顕著で、しかも連続的な変化を示しているため、これを型式分類の拠りどころにしたい。なお便宜的に、銘帶の構成によって重圏銘帶鏡と単圏銘帶鏡とに分けて説明をおこなう。

異体字銘帶鏡Ⅰ式(図一〇—1) 字体dをもつもの。重圏銘帶鏡のみ知られる。内圏に銘文C、外圏に銘文Gという組合せか、銘文Gと斜角雷文という組合せが多い。鈕座は、四葉文a、b、連珠文など。まれに連弧文縁となるものがある。①

⑯ 河南洛陽老城西北郊八一号墓(『考古』一九六四年第八期)、河南洛陽西郊三二七一号墓(『考古學報』一九六三年第二期)、江西南昌東郊一号墓・同一四号墓(『考古學報』一九七六年第二期)。

⑰ 中国社会科学院考古研究所ほか注⑤。

⑱ カールグレンJ二五、広州漢墓二一七三号墓(広州市文物管理委員会・広州市博物館『広州漢墓』、北京、一九八一年、図九一)など。

⑲ 梅原未治『漢以前の古鏡の研究』(『東方文化学院京都研究所研究報告』第六冊、京都、一九三五年)五〇頁。

異体字銘帯鏡Ⅱ式(図一〇—2) 字体 e・f のもの。重圏銘帯鏡は、内圏に銘文 C<sub>2</sub>、外圏に銘文 E、もしくは内圏に銘文 E、外圏に銘文 D という組合せが一般的である。単圏銘帯鏡が出現し、銘文 C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>・E のいずれかをいれる。銘文 C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub> の字間には渦文をほどこす。鈕座には、四葉文 a<sub>2</sub>、連珠文、連弧文、輻射文 a など多くの文様が存在する。

異体字銘帯鏡Ⅲ式(図一〇—3) 字体 g のもの。重圏銘帯鏡は、Ⅱ式にみた二通りの銘文の組合せのほか、内圏に銘文 C<sub>1</sub>、外圏に銘文 E という組合せが出現する。単圏銘帯鏡は、Ⅱ式にみた三種の銘文のほか、銘文 C<sub>1</sub> や銘文 D をいれる。重圏、単圏を問わず、銘文 C の字間には渦文と菱形文とを交互にほどこす。鈕座は、四葉文 a<sub>2</sub> が消失した以外はⅡ式の文様がそのまま存続している。なお、銘文 D をもつ単圏銘帯鏡は、連珠文鈕座、連弧文帯という構成に限定されるようである。

異体字銘帯鏡Ⅳ式(図一〇—4) 字体 h をもつもの。管見では、銘文 E か銘文 F<sub>2</sub>・F<sub>3</sub> をいれる単圏銘帯鏡を知ることとまる。鈕座には連珠文ないしは輻射文 a をあらかず。

異体字銘帯鏡Ⅴ式(図一〇—5) 字体 i をもつもの。重圏銘帯鏡は、内圏に銘文 E、外圏に銘文 F か銘文 H をいれる。単圏銘帯鏡は、銘文 E・F<sub>2</sub>・F<sub>3</sub>・H のいずれかをいれる。銘文 E はほとんど初めの二句だけとなって字間に而字形の記号をほどこし、計二〇字前後を数える。銘文 F・H をもつ単圏銘帯鏡には連弧文帯を必ずいれる。鈕座には、連珠文、連弧文、輻射文 a があり、また四葉文 c・d が新たに出現した。

異体字銘帯鏡Ⅵ式(図一〇—6) 字体 j をもつもの。単圏銘帯鏡のみ知られ、銘文 E・H などをいれる。銘文 E は字数が減少し、一五字程度になる。鈕座には四葉文 c・d、連弧文、輻射文 a がある。周縁に凹帯文や鋸歯文 b (図一一—4) をほどこす例が出現する。

以上のように字体の系列を基準に異体字銘帯鏡の型式分類をおこなったが、改めて鈕座文様と銘文自体の流行型式をまとめておこう。まず鈕座文様は、連珠文がⅠ—Ⅴの各型式に、連弧文と輻射文 a がⅡ—Ⅵの各型式に幅広くあらわれる。これに対し、四葉文 a<sub>2</sub> はⅠ・Ⅱ式に、四葉文 c・d はⅤ・Ⅵ式に限られるようである。銘文では、銘文 G がⅠ式に、銘文

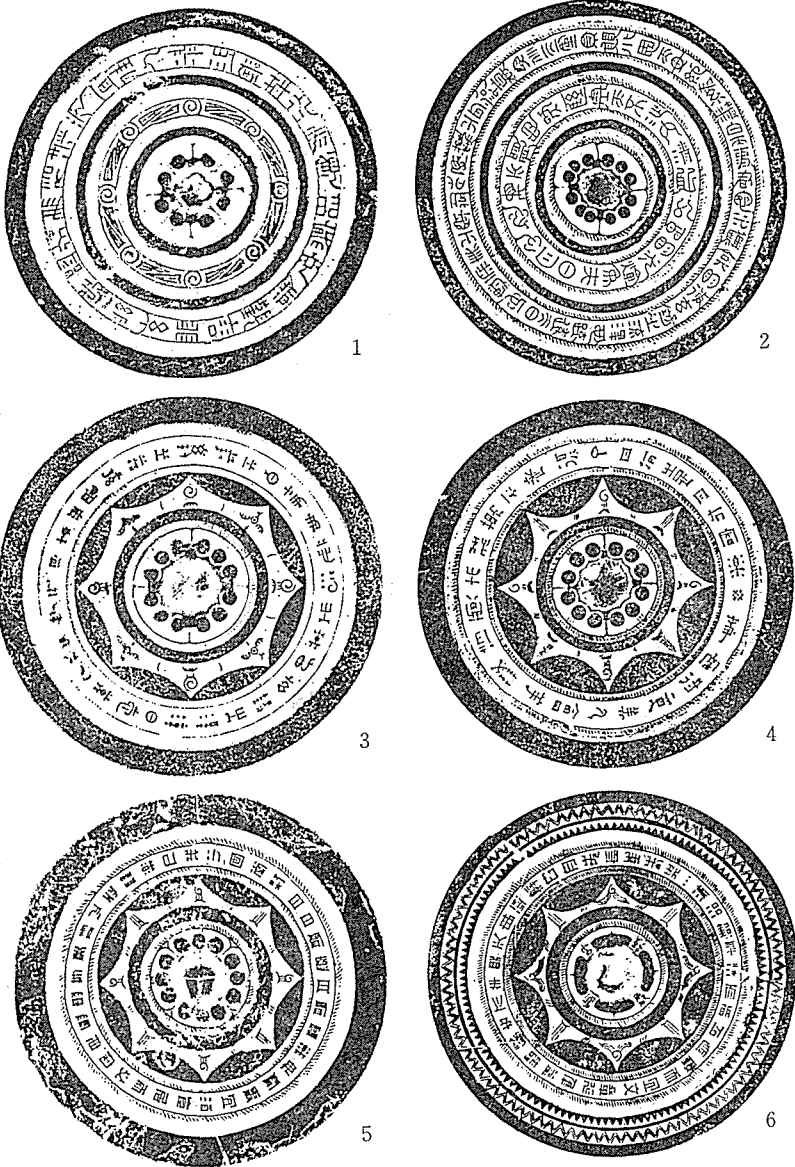


図10 異体字銘帯鏡 (1: I式 径 11.0cm, 2: II式 径 15.9cm, 3: III式 径 14.7cm, 4: IV式 径 17.1cm, 5: V式 径 15.5cm, 6: VI式 径不詳)

CがⅠ—Ⅲ式に存在し、なかでも銘文C<sub>1</sub>はⅢ式に限られる。銘文DはⅠ—Ⅲ式、銘文FがⅣ・Ⅴ式、銘文HがⅤ・Ⅵ式に限られるのに対し、銘文EはⅡ—Ⅵ式に幅広くあらわれている。ただしⅤ・Ⅵ式の銘文Eは、ほとんど初二句だけの短銘となっている。このように単位文様や銘文の流行型式には各々差のあることが判明した。

次に前章で編年をおこなった鏡式との併行関係について考察する。字体の変化を連続的なものと認めるならば、字体dをもつ異体字銘帯鏡Ⅰ式は、字体cをもつ草葉文鏡Ⅱ式をさかのぼるものではなく、それに後続することが予想される。

また異体字銘帯鏡Ⅰ式のなかに草葉文鏡や星雲文鏡の特徴の一つであった連弧文縁をもつものがあることは、それらと時的に近接する可能性を示唆している。この関係をさらにはっきりさせるのが、異体字銘帯鏡Ⅰ・Ⅱ式に存在した鈕座の四葉文a<sub>2</sub>である。この単位文様は、星雲文鏡Ⅱ式の分類基準とした乳の四葉文a<sub>2</sub>と同一の文様であることから、異体字銘帯鏡Ⅰ・Ⅱ式と星雲文鏡Ⅱ式とが併行するものであると考えられる。

最後に絶対年代について、年代の明らかな遺跡の出土例を参考にして考察しよう。江蘇邗江胡場五号墓では、被葬者が前七一年に死去し、翌年に埋葬されたことを記した木牘を伴って異体字銘帯鏡Ⅲ式が出土している。<sup>②</sup>同様に異体字銘帯鏡Ⅲ式が出土した河北定県四〇号墓は、金縷玉衣が発見された「黄腸題湊」系の大型墓であることから、当地に封ぜられた中山王の墓と推測され、同時に出土した五鳳二年(前五七年)の紀年をもつ竹簡などからみて、前五六年に没した中山王修の墓であろうとされる。<sup>③</sup>このようにみると、異体字銘帯鏡Ⅲ式の年代は、前七〇—一五〇年代に考定してほぼ間違いないであろう。それに先行するⅠ・Ⅱ式を前一〇〇—一七〇年代におく見当が認められるならば、異体字銘帯鏡は前章で検討した前二世紀代の鏡と矛盾なく繋がることになる。

異体字銘帯鏡の終末は、Ⅵ式に属する居撰元年(後六年)鏡<sup>④</sup>によって一世紀初頭に定める。したがって前一世紀の全般にわたって異体字銘帯鏡が用いられていたことになる。

① 〈繩口古鏡〉 図版二八一五六、同二九一五八など。

② 揚州博物館・邗江県図書館「江蘇邗江胡場五号漢墓」《文物》一九

八一年第八期。

③ 河北省文物研究所「河北定興四〇号漢墓發掘簡報」《文物》一九八一年第八期。『最初の略報（河北省博物館ほか「定興四〇号漢墓出土的金縷玉衣」《文物》一九七六年第七期）では、前八年に没した中山

王興の墓に比定したが、整理の過程でこれを改めている。

④ 梅原末治『漢三國六朝紀年鏡圖説』《京都帝國大学文学部考古学資料叢刊》第一冊、京都、一九四三年）図版一。

## 五 細線動物文鏡類

いまかりに細線動物文鏡類と呼んだものは、方格規矩四神鏡、獸帶鏡、虺龍文鏡を含み、細線表現のさまざまな動物文によって主文が構成される一群の鏡である。主文表現の共通性以外にも、相互に多くの単位文様を共有して深い横の繋がりがある。方格規矩四神鏡と獸帶鏡とは後漢時代にひき継がれるが、ここでは王莽代を含む前漢時代に属する型式のみを取り上げる。

### 1 方格規矩四神鏡

四神を主体とする写実的な動物文を主文とし、方格鈕座、TLV形のいわゆる規矩文をもち、平縁となる周縁をもつ鏡である。①

銘文から王莽代を中心とする時期に作られたことが富岡謙蔵によって指摘されているが、明確な根拠を示して細かい編年をおこなった論文は数多くない。山越茂は、主文や乳の数、主文の配置、周縁文様などを分析し、藤丸詔八郎も乳の数と周縁文様を基準に分類をおこなった結果、素文や凹帯文の周縁で四個の乳をもつものは前漢代にさかのぼることなどが明らかにされた。一応妥当な結論と認められるが、ここでは単位文様の個数や配置が取りあげられるにとどまって、文様やその系列にはほとんど注意が払われず、型式学的な操作に問題がある。

方格規矩四神鏡の文様単位には、主文、鈕座、乳、周縁および銘文が識別できる。そのなかでまず、主文と周縁につい

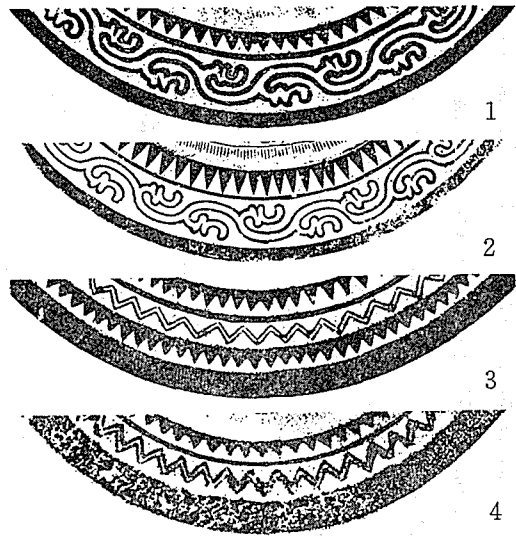


図11 周縁文様

て観察しておこう。

主文を大きく、動物文、渦文、いわゆる埴文の三種に分ける。

動物文はまず図像の数によって、四像からなるものと八像からなるものとに分ける。四像、八像ともに青龍、白虎、朱雀、玄武という東西南北に位置する四神によって構成されることが多いが、八像からなるものには、青龍に龍または神人、白龍にシカまたはそれに乗る神人、朱雀に鳥、玄武にカエルまたは一角獣というように、四神に対応する獣がしばしば固定してみられる。これら図像とその配置は多様であるが、一つの規則として、八像に空間充填文として小獣や小鳥、渦文を付加した優美な文様の場合、四神の各々が方格各辺の右側に位置し、対応する図像と方格の角をはさんで向き合う配置となり、そうでない場合は、四神と対にな

る図像を方格各辺に沿って平列したり、四神がそのあらわす方位とは一致しない配置、あるいは四神の一部が欠けて別の獣に置き替わったりするなど、配置が流動的になることが指摘できる。要するに、文様が精緻で固定的な配置をとるものと、比較的簡素な文様であるが自由な配置をとるものとの二形態に分けることができ、前者を八像対角配置、後者を八像自由配置と仮称する。

周縁文様の変化は、装飾性を増す方向として理解できる。まず素文の周縁に始まり、その中央に一条の文様帯をもつ凹帯文から、二重の文様帯をもって装飾性を増した、獣文、画象文、唐草文、流雲文、鋸歯文に発達したと考えられる。このなかで流雲文については、その鋸歯文帯の山が低い流雲文 $a_1$ (図一―一)と、高い流雲文 $a_2$ (同―二)とに分け、鋸歯文に



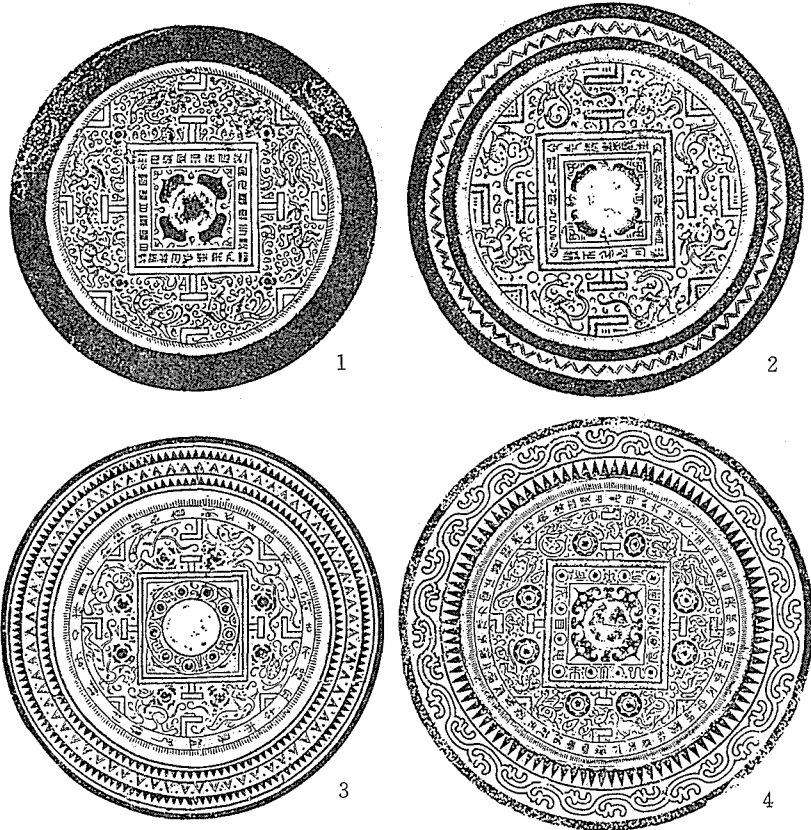


図12 方格規矩四神鏡 (1: I式 径 15.5cm, 2: II式 径 16.2cm, 3: III式 径 18.5cm, 4: IV式 径 18.8cm)

ついでには、鋸歯文帯と複線波文帯との二重の文様帯からなる鋸歯文b(同14)と、その外側に鋸歯文を加えた鋸歯文a(同13)とに分ける。

方格規矩四神鏡の分類においては、周縁文様を基準にし、四型式に分ける。

方格規矩四神鏡I式(図一二一1) 周縁文様が素文のもの。鈕座は四葉文cが多く、ほかに簡素文などがあり、多様である。主文は四像動物文が多いが、八像自由配置、渦文も存在する。一般に乳は四個で、素文b、四葉文bをもつ。銘文をもつ場合は、字体iによる銘文F・Hをいれる。面径はばらつきが大きく、八一―一九cm。

方格規矩四神鏡II式(図一二一

2) 周縁文様が凹帯文のもの。鈕座に新たに輻射文b、乳帯文が加わる。主文は八像動物文が増加し、自由配置をとる。いわゆる博文が出現する。乳は依然四個が中心である。円座乳が出現する。銘文はあまり変わらないが、字体kが少例ながら出現する。面径はばらつきが大きく、八一—二〇cm。

方格規矩四神鏡Ⅲ式(図二—13) 周縁文様が獸文、唐草文、流雲文a<sub>1</sub>、鋸齒文a・bのもの。周縁文様の種類と装飾性が豊かになる段階である。鈕座は、輻射文b、乳帯文が多く、新たに十二支文bが出現するが、四葉文cはみられなくなる。主文は八像自由配置が主で、わずかながら四像、いわゆる博文、渦文も存在する。乳は八個が一般的となり、円座、四葉文b、輻射文、連弧文など多様になる。銘文は字体kが中心で、若干の字体lが出現する。銘文Mが多く、ほかに銘文l・k・oなどが存在し、これらはすべて新たに出現した銘文である。面径はばらつきが大きく、一〇—二二cm。

方格規矩四神鏡Ⅳ式(図二—14) 周縁に流雲文a<sub>2</sub>をもつもの。鈕座は十二支文a・b、主文は八像対角配置にかわり、八個の円座または連弧文乳をもつ。すべてに銘文が存在し、字体lによる銘文K・L・Nをいれるほか、銘文Mも若干存在する。面径は一六—二三cmと大型である。多様なⅢ式とは反対に、精緻であるが定型化し、方格規矩四神鏡として取りあげられる代表的な型式である。

以上の型式分類から改めて単位文様の主要な変化をみておこう。方格鈕座に方位をあらわした方格規矩四神鏡だけに特徴的な十二支文は、Ⅲ式に始めて出現し、Ⅳ式には独占的な鈕座文様として定着する。主文は、最初は四像が中心で、次に八像に比重が移っていくが、Ⅰ—Ⅲ式では図像とその配置が流動的で多様性に富んでいた。Ⅳ式になると四神が不可欠の図像となり、鈕座の十二支が確立したことに対応して八像対角配置に固定し、小獸や渦文などで空間を充填した最も優美な文様に発展する。またこの変化に対応して乳の数が四個から八個が増え、その文様もⅢ式にいたって最も多様化するが、Ⅳ式になると円座と連弧文の兩種に絞られる。周縁文様も同様な装飾化、多様化と、最後には定型化の変遷を示し、これら単位文様の変化は一連の動きとして把握できであろう。

方格規矩四神鏡の年代については、銘文Mに「新有善銅」、銘文Nに「王氏作鏡四夷服多賀新家人民息」とあることから、その鏡が王莽代に製作されたと考証され、時に「王莽鏡」と呼ばれることがあった。ところが銘文Nをもつ「王莽鏡」は主文が複雑精緻で銘文も完備しているのに比べ、「新有善銅」銘をもつ鏡は銘文、主文ともに簡略化しており、王莽の新を否定した後漢時代になっても「新有」の銘文を借用したことがあったのではないか、という意見が提出されている。<sup>⑦</sup>

しかし字体をみれば、銘文Mの多くは字体bによるから、字体Iによる銘文Nより新しいとは考えにくい。また主文はむしろ逆の変化を示している。そこで改めて右の型式分類によって再検討を加えると、銘文NはⅣ式に限られ、「新有善銅」銘はⅢ式とⅣ式とにまたがってあらわれているから、銘文NをもつⅣ式を王莽代に比定するならば、「新有善銅」銘はそれに後出することはないと考えられる。したがって、それを後漢時代における借用と考える必要がないばかりか、銘文からいう「王莽鏡」はそのまま王莽代の製作と認められ、方格規矩四神鏡Ⅲ・Ⅳ式の製作年代は、そのうちに王莽代を含んでいると理解しうる。

いっぽう、銘文Mの初句は「漢有善銅」でも始まっているが、この「漢」は前漢を指すのか、それとも後漢なのか。右の型式分類に照らしてみると、「漢有善銅」銘の鏡はすべてⅢ式に含まれる。Ⅳ式が王莽代に含まれるのであるから、それは前漢代に位置づけられ、前漢の「漢」ということになろう。先に指摘したように、Ⅲ式の一部は王莽代におよぶので、Ⅲ式は前漢末から王莽代、Ⅳ式は王莽代はその始まりがあるという結論に到達する。

紀年鏡には、Ⅲ式に属する始建国天鳳二年(一〇年)鏡<sup>⑧</sup>があり、いま推定した年代観に符合している。

方格規矩四神鏡Ⅲ・Ⅳ式の年代がこのように決まると、それに先行するⅠ・Ⅱ式は、ほぼ前一世紀後葉に位置づけられ、異体字銘帯鏡と時期の上で重なることが予想される。単位文様で併行関係を確認しておく、Ⅰ・Ⅱ式に存在した鈕座の四葉文cおよび銘文F・H、字体iは、異体字銘帯鏡Ⅴ・Ⅵ式にも共通してあらわれている。周縁文様では、異体字銘帯鏡Ⅴ式に凹帯文・鋸齒文bをもつものがあり、これは方格規矩四神鏡Ⅱ・Ⅲ式に対応する。とくに異体字銘帯鏡Ⅴ式に属

する居撰元年(後六年)鏡は、周縁に鋸歯文bをもつ点で方格規矩四神鏡Ⅲ式に対応し、推定した絶対年代の上でも全く矛盾しない。これらことから、方格規矩四神鏡Ⅰ・Ⅱ式が異体字銘帶鏡Ⅴ式と併行し、方格規矩四神鏡Ⅱ・Ⅲ式が異体字銘帶鏡Ⅵ式と併行するものと考えられる。

## 2 獸帶鏡・虺龍文鏡

獸帶鏡は、同心円状に鏡背文を分割し、主文の動物文が回転性をもってめぐる鏡である。主文の表現などに方格規矩四神鏡との共通性が強くあらわれ、型式分類では、それと同様に周縁文様を基準にする。すなわち、周縁文様が素文のものをⅠ式(図一三一―1)、凹帯文のものをⅡ式(同―2)、一重の文様帯からなる多様な周縁文様をもつⅢ式(同―3)に分ける。そして周縁文様の共通性から、それぞれ方格規矩四神鏡のⅠ・Ⅱ・Ⅲ式に併行するものと考ええる。獸帶鏡の鈕座、乳、銘文などの単位文様の分析の方法は、方格規矩四神鏡の場合と変わらないため、繁を避け省略したい。

虺龍文鏡は、細線表現による逆S字形の虺龍文を四個の乳の間に配置する鏡である。一般に円座乳をもち、素文の周縁となる。銘文をもたない。型式分類について〈樋口古鏡〉は、主文の逆S字形に付属する動物文と鈕座文様とを基準に三型式に分けている。その分類に従って、虺龍文の内外に虎・龍などを配し、連珠文ないしは四葉文。鈕座をもつものをⅠ式(図一三一―4)、虺龍文の内外に整った小鳥をおき、輻射文a鈕座をもつものをⅡ<sup>A</sup>式(同―5)、小鳥が簡略になり、輻射文b鈕座をもつものをⅡ<sup>B</sup>式(同―6)とする。鈕座文様の変化に伴って主文に付属する文様が退化したと考えるわけである。またこれは同時に面径の縮小化とも相関している。

虺龍文鏡と他鏡式との併行関係は、鈕座文様しか共有関係が認められないため確実を期し難いが、虺龍文鏡Ⅰ式の四葉文。鈕座は方格規矩四神鏡Ⅰ・Ⅱ式に存在し、虺龍文鏡Ⅱ<sup>B</sup>式の輻射文bは方格規矩四神鏡Ⅱ式に出現しⅢ式に盛行したことから、虺龍文鏡Ⅰ―Ⅱ<sup>B</sup>式は方格規矩四神鏡Ⅰ―Ⅲ式に併行するものと推測する。

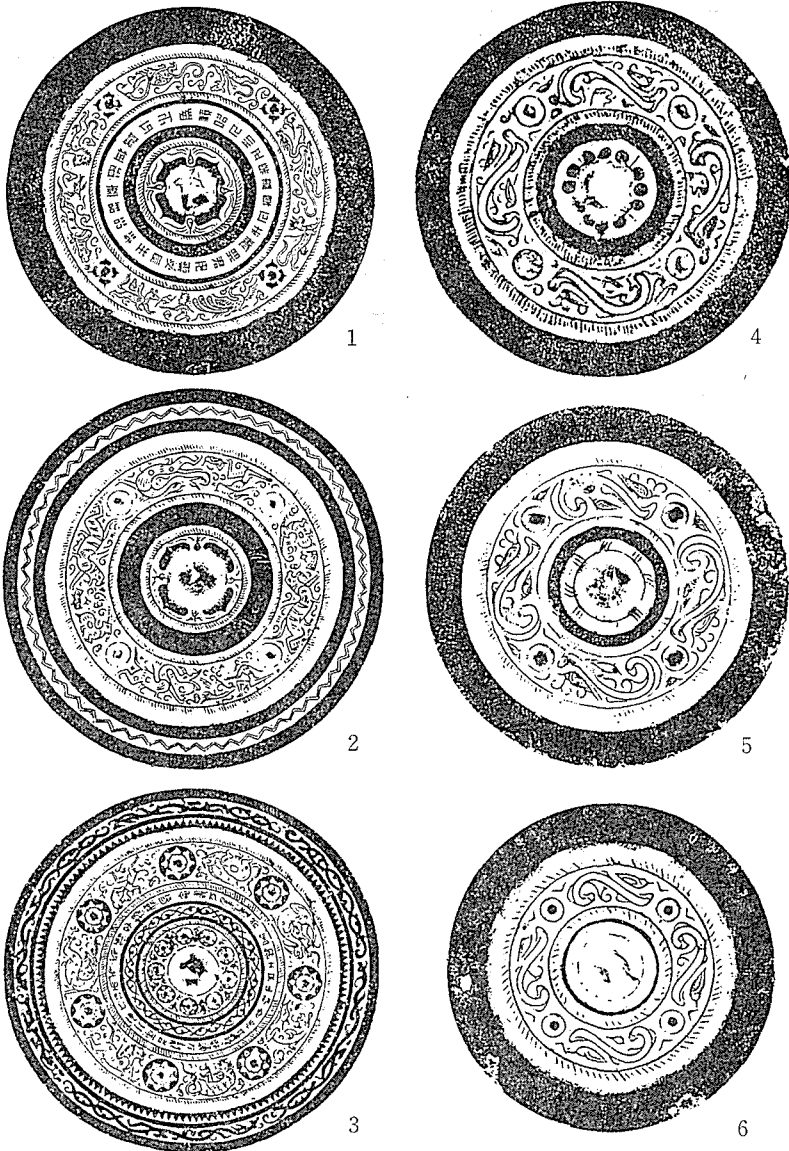


図13 獸帶鏡 (1: I式 径 18.8cm, 2: II式 径 16.1cm, 3: III式 径 18.4cm), 虺龍文鏡 (4: I式 径 10.5cm, 5: II A式 径 11.4cm, 6: II B式 径 8.7cm)

① 四神が完全でないもの、渦文だけからなるものがあることから、総称として方格規矩鏡と呼ばれることもあるが、それは主文様に対する名称でないため、必ずしも適切とはいえない。蟠螭文鏡のなかにも方格鈕座と規矩文をもつものがあるからである。ここでは慣例に従って方格規矩四神鏡の名称を用いる。

② 富岡謙蔵 第一章注①。

③ 山越茂「方格規矩四神鏡考」(『考古学ジャーナル』№九三・九五・九六、一九七四年)。

④ 藤丸詔八郎「方格規矩四神鏡の研究」(『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』、東京、一九八二年)。

⑤ 四神と他の獣との組合せおよびその配置について最初に注意したの

は鈴木博司である(『守屋孝蔵蒐集 方格規矩四神鏡図録』、京都、一九六九年)。鈴木はそのなかで、各組を方格の辺に沿って平列する方法が、方格の角をはきんで置くより古いことを指摘した。

⑥ 富岡謙蔵 注②。しかし高橋健自が「王氏作竟」の銘文をもつ神鏡や画像鏡まで王莽代のものとした(『王莽時代の鏡に就いて』『考古学雑誌』第九卷第一二号、一九一九年)のは拡大解釈である。梅原末治の批判するように、「王氏作竟……多賀・国家」などの銘文は必ずしも王莽代とはいえない(『所謂王莽鏡に就いての疑問』『考古学雑誌』第一〇卷第三号、一九一九年)。

⑦ 樋口隆康 第二章注②。

⑧ 梅原末治 第四章注④ 図版一。

## 六 時期区分と様式

二〇〇年余りにおよぶ前漢代の各鏡式の型式分類の編年、鏡式間の相対編年について考察してきた。主に単位文様の共有関係によって鏡式間の相対編年を組立てたが、それを検証するために、漢墓における鏡どうしの同伴関係を検討してみた(表一)。管見におよんだ四九例の過半数が文様から組立てた編年の妥当性を裏付ける関係を示し、これによって以上におこなった編年がほぼ検証されたものと考ええる。もっともなかに厳密な意味での一括遺物ではない例が含まれるため、今後の確実な資料の増加と、それによる補訂が望まれるのは言を俟たない。

さて、この編年を認めた上で、前漢鏡を特徴的な鏡式を基準に大きく四期に区分する(表二)。第一期は蟠螭文鏡を中心とし、以後の各期はそれぞれ、第二期は草葉文鏡、第三期は異体字銘帯鏡、第四期は方格規矩四神鏡の出現を画期とする。絶対年代をみると、第一期が前二世紀前半、第二期が前二世紀後半、第三期が前一世紀前半から中葉、第四期が前一世紀後葉から一世紀前葉、というように各時期がほぼ等しく五〇年余りの時間幅をもっている。

表1 鏡の相伴関係

遺 跡	埋葬数	鏡 の 型 式		文 献
安徽阜陽双古堆M 2	1	蟠 I	蟠 II	文物78—8
河南洛陽29区M345	?	蟠 I	渦 II	洛陽出土古鏡
山西太原東大堡墓	?	草 I × 4	螭 I	文物62—4・5
雲南晉寧石寨山M 1	1	草 II A	星 I × 2	考古學報56—1
河南新安鉄門鎖M37	1	草 II B	渦 II	考古學報59—2
江西南昌東郊M14	2	草 II B	異 II	考古學報76—2
河南洛陽老城西北郊M81	2	草 II B	異 V	考古64—8
江蘇銅山小龜山墓	1	螭 I × 4		文物73—4
四川成都羊子山M30	?	螭 I	星 I	考古通訊55—6
四川成都羊子山M119	?	螭 I	星 I	四川省出土銅鏡
河北懷安北沙城M 6	2	異 II	星 II	萬安北沙城
江蘇連雲港霍賀墓	2	異 II	星 II	考古74—3
陝西咸陽馬泉墓	1	異 III × 4		考古79—2
江蘇邳江胡塢M 3	1	異 III × 3		文物80—3
遼寧旅大營城子M25	1	異 III × 2		考古學報58—4
河南洛陽金谷園車站M11	2	異 III × 2		文物83—4
江蘇連雲港網嶺庄墓	2	異 III × 2		考古63—6
安徽天長M 3	1	異 III × 2		考古79—4
安徽天長M 4	1	異 III × 2		考古79—4
湖北光化M 5	?	異 III × 2		考古學報76—2
廣東広州M2029	?	異 III × 2		広州漢墓
江蘇邳江胡塢M 5	2	異 III	星 II	文物81—11
河南洛陽姚溝M138	1	異 III	異 IV	洛陽姚溝漢墓
遼寧旅大營城子M 1	2	異 III	異 V	考古學報58—4
河南洛陽姚溝M41	2	異 III × 2	方 III	洛陽出土古鏡
河南洛陽姚溝M59B	2	異 III	方 II × 2	洛陽姚溝漢墓
河南洛陽30工区M14	3	異 III	方 III	文物參考資料55—10
河南洛陽西郊M3006	2	異 III	獸 II	考古學報63—2
江蘇儀徵石碑村M 2	2	異 III × 2	虺 II A	考古66—1
江蘇塩城三羊墩M 1	3	異 III	虺 II A	考古64—8
安徽蕪湖賀家園M 2	2	異 III	異 V	虺 II A
河南洛陽姚溝M632	3	異 IV	異 V	考古學報83—3
河北懷安M 1	2	異 V × 4		洛陽姚溝漢墓
江蘇東陽盱眙東陽M 7	2	異 V × 2		萬安北沙城
廣西合浦堂排M 2	2	異 V × 2		考古79—5
湖南長沙五里牌M12	?	異 V	方 I	文物資料叢刊 4
河南洛陽姚溝M1028A	2	異 V	方 II	文物60—3
湖南長沙伍家嶺M211	2	異 V	方 II	洛陽姚溝漢墓
河南洛陽卜千秋墓	2	異 V	虺 II A	長沙発掘報告
湖南長沙楊家山M304	2	方 I	虺 I	文物77—6
湖南長沙湯家嶺M 1	1	方 II	獸 II	考古學集刊 1
湖南長沙黒槽門M 2	?	方 II × 2		虺 II B
陝西千陽漢墓	2	方 II	獸 II	考古66—4
江蘇盱眙東陽M 4	2	方 II	獸 II	湖南出土銅鏡図録
河南洛陽姚溝M38A	2	方 II	虺 II A	考古75—3
河南洛陽姚溝M1005	1	方 III	虺 I	考古79—5
湖南長沙黄土嶺M51	?	方 III	獸 I	虺 I
河南洛陽西郊M3079	2	獸 III × 2		洛陽姚溝漢墓
湖南長沙黄泥坑M 5	?	虺 I	虺 II A	洛陽姚溝漢墓
				湖南出土銅鏡図録
				考古學報63—2
				考古通訊56—6

鏡式名は頭文字で表示した。

表2 前漢鏡の編年

年代	150		100		50		BC		AD	
	時期		時期		時期		時期		時期	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
蟠螭文鏡	I	III								
螭文鏡	II	I								
文鏡		II A								
文鏡		II B								
文鏡		I								
龍文鏡										
雲文鏡										
銘帶鏡										
四神鏡										
方格鏡										
獸帶鏡										
螭龍文鏡										

1 文 様

四期に時期区分をおこなった各時期の鏡の文様の特徴と、併行する鏡相互の文様上の関係や系譜について考察する。

第一期 蟠螭文鏡Ⅰ・Ⅱ式の段階である。蟠螭文鏡に用いられた三弦鈕、乙面縁、地文は戦国鏡の主要な要素であり、蟠螭文鏡の出現も戦国時代末にさかのぼると考えられることからすれば、その伝統が強く残っている時期といえるだろう。主文の蟠螭文は、頭や爪など部分的に写実的な表現が認められるけれども、体軀全体は細い帯状の連鎖曲線に抽象化し、そのために奇怪かつ神秘的な印象さえ与えている。

蟠螭文鏡Ⅱ式に用いられた「脩相思」で始まる銘文A<sub>1</sub>の考証から、それが淮河流域での製作と推定されていることはすでに指摘した。この型式も含めて第一期の蟠螭文鏡の出土地を調べると、分布の密度は淮河流域、長沙および広州周辺に高く、全体的に南方に偏っている。

製作地と分布がこのようなようであり、また文様に戦国鏡の伝統が強くあらわれていることからみれば、これを真正の「漢様式」と認めることには躊躇を感じる。従来こうした蟠螭文鏡を「戦国式鏡」に分類していたのも決して故なしとしない。年代の上からみると、前一五四年に勃発した呉楚七国の乱の前夜に相当し、地域的にもその動乱と重なるところがある。漢が文化的に統一



される前の段階の様相を示しているものと理解したい。

第二期 草葉文鏡の出現を画期とする。草葉文鏡は、純粹な植物文様によって構成され、龍をモチーフとした蟠螭文鏡とは明確な対照をなすばかりか、戦国鏡の主要な要素で第一期にも受け継がれた地文を取りいれず、三弦鈕や匕面縁にかわる獸鈕や半球鈕、連弧文縁を多用するなど、所与の鏡とは別の、全く新しい意匠をもって創出されたのである。

同時に第一期の蟠螭文鏡の系譜をひく鏡が存在する。一つは直系ともいえるべき蟠螭文鏡Ⅲ式である。もう一つは渦状虺文鏡へと簡略化していく系統である。これら二系統の鏡が、三弦鈕、匕面縁、地文といった戦国鏡以来続いてきた要素をとどめるのに対し、螭龍文鏡へと発展したもう一つの系統では、龍をモチーフとする点で蟠螭文鏡の系譜をひくが、獸鈕や半球鈕、連弧文縁をもち、地文を失なっている点でむしろ草葉文鏡に近い。主文の螭龍文が真にせまった躍動的な表現であることも、他の二系統と大きく異なる点である。

このように第一期の蟠螭文鏡から三系統の鏡が生みだされ、その変化のあり方は実に多様である。しかしモチーフの対照的な草葉文鏡も含めてこの時期の鏡は、いずれもが互いに単位文様を共有して有機的に関連し、孤立した鏡はひとつとして存在しない。多様ななかにも文様の上である繋がりをもっているところにこの時期の特色がある。

草葉文鏡が戦国鏡の要素を払拭し、文様の上で確立した漢鏡としての意義をもつだけでなく、分布の上でも地域的な枠から脱却し、中国の南北に広い拡がりをみせる。草葉文鏡のみならず、蟠螭文鏡の系譜をひく渦状虺文鏡も同様に、北は遼寧・内蒙古から南は広東まで広い分布を示している。この時期の鏡の製作地についてはなお問題を残すが、地域的な偏りがほぼ解消し、文様の上で多様性のなかにも相互に有機的な連関が認められる背景に、前漢中期、武帝代の政治や社会が安定し活況を呈した情勢が文化にも反映し、広汎なまとまりをもつようになったことが窺える。

第三期 異体字銘帯鏡の出現を画期とする。異体字銘帯鏡は、銘文と幾何学的な文様が中心の、簡潔にして清楚な文様構成となっている。異体字銘帯鏡全般を通じて、銘文とその字体などに細かな変化が認められたことを除き、その定型化

した文様および文様構成を固く維持し続けた。しかも、第三期の早い段階まで星雲文鏡が残っていたとはいえず、多様な鏡式が併存した第二期とは対照的に、異体字銘帯鏡を主流とした極めて画一的な時期であったことに注意されるのである。

第四期 方格規矩四神鏡という新しい意匠をもつ鏡の創出が画期となる。細線による動物文を主体とすること、その動物文が写実的かつ躍動的であること、装飾性に富むことが大きな特徴となり、異体字銘帯鏡の画一性からぬけ出した自由な力を感じとることができる<sup>⑤</sup>。

方格規矩四神鏡の最も主要な文様である四神文は、方格規矩四神鏡の創出と同時に受容されたが、四神文が確立したのはⅣ式の段階においてであって、それ以前の段階では、四神の一部が別の獣と交替したり、四神がその示す方位と一致しない流動的な配置をとるなど、かなり混乱している。そもそも鈕座に十二支の銘文があらわれて方位が確定し、「左龍右虎掌四方 朱雀玄武順陰陽（銘文Ⅱ）」という役割が四神に期待され始めたのはⅢ式の段階からで、それ以前は四神を含めたさまざまな動物が自由に寄り集まり、たわむれる世界であった。Ⅳ式すなわち王莽代にいたって方格規矩四神鏡は、四神と十二支とによる約束が固定し、また主文に空間充填文として小獣や渦文を余すところなく付加して、最高の優美を誇るようになったのである。

同様の動物文を主文とする獣帯鏡は、方格規矩四神鏡とほぼ同時に創出された。その鈕座は円圈をなし、その構成上、方位による束縛がないため、四神を含めたさまざまな動物が鈕座の外側を回転性豊かにとりまき、その自由なありさまは方格規矩四神鏡Ⅰ―Ⅲ式の段階に共通する。

いっぽうこの時期には異体字銘帯鏡がひき続き存在し、新たに虺龍文鏡が出現している。いずれも方格規矩四神鏡や獣帯鏡と単位文様を共有し、有機的な関連をもっている。しかし異体字銘帯鏡は、動物文を主体とする方格規矩四神鏡や獣帯鏡とは文様が異質であり、ほどなく衰退、消失してしまふ。また虺龍文鏡は、細線表現の動物文を主文とする点で方格規矩四神鏡や獣帯鏡に類似した特徴をもつが、単純な文様構成をとり、一貫して素文縁となる特徴はむしろ異体字銘帯鏡

に近く、同様に退化の経過をたどって、ほどなく消失にむかっている。

画一的な第三期とは反対に、第四期は再び鏡式が多様になった。なかでも細線表現の動物文が大いに愛好された時期とみることができよう。

## 2 銘 文

漢代の銅容器や漆器などの銘文が実用的な目的で刻まれたのと対照的に、鏡の銘文は韻文の形態をとり、そこには人々の感情や意識が濃厚に铸だされている。鏡の銘文を分析すれば、文様や図像などよりずっと直接的に製作者や社会の意識なり思潮を読みとることができるとはならずである。

前章までは銘文を編年の一要素として扱ってきたが、ここでは前漢鏡の四期区分に従って銘文の意味内容の変化を把握し、鏡に表現しようとした意識の変動について考察をおこなってみたい。

第一期 鏡に始めて銘文が出現した。銘文をもつ例は多くないが、

脩ススく相思ふ 相忘ること母らん 常楽未だ央ウツぎず（銘文A<sub>1</sub>）

という吉祥句で願望を表現している。

第二期 銘文A・Bなど第一期末に続いて願望を表現した吉祥的な銘文が存在し、

日に喜びあり 酒食に宜し 長く貴富にして 楽しみて事母し（銘文F<sub>1</sub>）

のような幸せいっぱいの楽天的な姿勢を鮮明に打ちだした銘文が流行する。<sup>⑤</sup> 鏡にそういった現実的な快樂をもたらす力があると思われたのであろう。

第三期 銘文C・D・E・Gが流行する。やや難解な語句もあるが、その大意をみると、銘文Dは「いさぎよい気持ちで君につかえていたのに邪魔がはいって容れられず、やむなく靈泉を慕って去るが、永く思いだして欲しい」というもの

であり、銘文Eは「日月のように清い心で忠を願っても邪魔がはいって通じない」とほぼ似た内容を表現している。<sup>⑥</sup>曇ったまま顧みられないでいる鏡に仮託して正義に立つ者の受難を訴えたものであるが、文体・語句ともに『楚辭』離騷に類似し、それによっても失意の悲しみを想起させる、という指摘は妥当なものと思われる。第二期の楽天的な姿勢と相反する、このような悲哀にみち寂寥感にあふれた銘文が流行した背景を考えた場合、単に楚辭文学が流行、整理された時にあつたという理解<sup>⑦</sup>では不十分であろう。この憂愁の思いをあらわした異体字銘帶鏡が、簡潔清楚な文様をもち、鏡式の多様性に乏しい画一的な時期であつたことを考え合わせる時、そこに禁欲的態度を重んじる厳しい精神が社会の深い関心と呼んだ時期であつたことが見出せるのではなからうか。

このような傾向は早く第二期末に徴候があらわれ、たとえば草葉文鏡の  
秋風起り 予が志悲しむ 久しく見ず 前に待ること稀なり

という離別の悲哀を表現した銘文<sup>⑧</sup>とも相通じるように思われる。

第四期 ところが第三期の末から第四期の早い段階にかけて、この思潮が大きな転換をとげる。

日に喜びあり 月に富あり 樂しみて事毋く 常に意を得 美人会して 竿瑟侍す 賈市程あり 万物平らかなり 老は丁に復れ 死は生に復す 酔いては知らず 醒むれば旦星(銘文F<sub>3</sub>)

と、第二期に流行した銘文F<sub>1</sub>を改句して現実の快樂をより具体的に強調した銘文があらわれる。銘文F<sub>2</sub>・F<sub>3</sub>よりやや遅れて出現した銘文Hでも同様に、第二期に流行した「千秋万歳」や「延年益寿」など四言の吉祥句があらわれている。このように銘文から判断する限り、この時期は第三期の精神を否定し、はるかに第二期を受け継いで現実主義・楽天主向の姿勢を強めたようである。もっとも併行して第三期に流行した銘文Eが存続しているが、末二句に表現している悲憤の感情が省略されて初二句だけとなり、

内は清質にして以て昭明なり 光輝は夫の日月を象る

と鏡の純粹さと美しさのみが強調され、本来の意味は喪失している。

第四期中頃になると、吉祥句のほか

太山上りて神人を見る 玉英を食らひ澗泉を飲む 交龍に駕して浮雲に乗る 白虎引直して天に上る (銘文I)

のような神仙世界を表現した銘文があらわれる。<sup>①</sup> また儒教的教義が浸透しつつあり、「大楽富貴」「千秋万歳」「延年益寿」といった吉祥句にかわって「長宜子孫」「長保一親」などの家族道徳を重んじる觀念があらわれてくる。そして第四期末の王莽代になると、銘文Nのような多分に政治性を帯びた銘文が出現する。<sup>①</sup>

第四期におけるこのような変化の激しさは、当時の思想動態を反映したものとみることができる。銘文に神仙的な内容や儒教的教義があらわれた背景に、神秘主義的な識緯説を取り入れた儒教の流行があったと考えられるし、それを利用して政権の座についた王莽は『周礼』に基いて祭祀儀礼の統一整備を企図したが、その結果として銘文に王莽の政治理念が語られ、宇宙を表現した方格規矩四神鏡の図像に確固とした約束ができあがるようになったのであろう。

以上、各時期の銘文から、そこに表出された意味内容の変化をみてきた。各時期の代表的な最小限度の銘文を例示するとどどまったが、それでも字句や字体だけでなく、意味内容にも大きな変動があり、時代の意識を反映しているらしいことが明らかに思ったと思う。とりわけ銘文の内容の変化が、文様の変革にわずかに先行し、すぐ前の時期とは全く対照的な内容に転換していることに注意しておきたい。まず意識の上に反動がおこり、次の段階にそれが文様の変革を導いたという想定も、あながち否定できないように思われる。

① 単次葬の墓の副葬品は一括遺物とみなしうるが、前一世紀代より合

葬の風習が広まり、鏡の同伴関係が同時副葬といえない状況が増加する。しかし二体の合葬墓は、一般に人骨や遺物からみて夫婦の合葬であると考えられ、それが全く同時とはいえないまでも、同世代ないしは同時期の副葬品とみなしうる。したがって二体合葬墓の資料は、単

次葬の例に比べて質的に劣るが、なお十分有効であろう。

② 蟬螭文鏡Ⅲ式に「脩相思」となる銘文A<sub>1</sub>が少例存在することから、

淮河流域での作鏡が継続していたことがわかる。しかし草葉文鏡Ⅰ式の銘文A<sub>2</sub>では「長相思」となることから判断すると、別の地域でも鏡が作られていたらしい。草葉文鏡ⅡB式の浴范が山東臨淄で採集されて

おり(関野雄『中国考古学研究』、東京、一九五六年、二七二頁)、その頃にはいくつかの地域で鏡が作られていた可能性がある。

③ 前漢末期は、動物文が大いに流行した時期である。鏡のほかに陶器や空心埴、壁画などにしばしば動物が描かれる。山西右玉から出土した河平三年(前二六年)銘のある金銅温酒樽(郭勇「山西省右玉県出土的西漢銅器」『文物』一九六三年第一期)は、この時期の様式を示す代表例である。

④ 四神文の確立期については、いまだ定説をみない。湖北随県曾侯乙墓出土の漆箱蓋に二十八宿の文字および龍と虎の図像が描かれていることから、四神の成立を戦国前期に求める意見がある(王健民・王勝利「曾侯乙墓出土の二十八宿青龍白虎図象」『文物』一九七九年第七期)が、この例は朱雀と玄武とを欠いている。前漢代の例をみると、武帝代の河北滿城二号墓出土の博山炉の蓋に馬、虎、ラクダ(?)、龍の四像がめぐっている(中国社会科学院考古研究所ほか第三章注⑧、図版一七五、図一七〇、一)が、玄武のかわりにラクダ(?)がはいっている。『淮南子』天文訓や『史記』天官書など前漢中期に書かれた書物でも四神の解釈に混乱がみられるという(林巴奈夫「漢鏡の図柄二、三について」『東方学報』京都第四四冊、一九七三年、一四—一九頁)。方格規矩四神鏡のあり方からすると、前漢末期まで流動的な四神の解釈がおこなわれていたようである。

⑤ 鏡以外にもよく似た内容の銘文があらわれている。たとえば河北滿城漢墓出土の金銀鳥虫書銅壺および宮中行樂銭を見よ(中国社会科学

院考古研究所ほか第三章注⑧、四三—四八頁、二七一—三頁)。

⑥ 銘文D・Eの解釈は、駒井和愛『中国古鏡の研究』(東京、一九五三年)一九—二七頁に従った。

⑦ 西田守夫「漢鏡銘拾遺——連弧文精白鏡の陳列に当って——」(『MUSEUM』一六三号、一九六四年)二八頁。

⑧ 岡崎敬「鏡とその年代」(立岩遺跡調査委員会編『立岩遺跡』、東京、一九七七年)三四〇頁。

⑨ 草葉文鏡B式にみる同類の銘文には、  
君行卒 予志悲 久不見 侍前希  
昔同起 予志悲 道路遠 侍前稀

などがあり、異体字銘帯鏡I式には、

君有行 妾有憂 行有日 反母期 願君強飯多勉之 仰天大息 長相思 毋久忘

と辺境に出征していく夫を案じる気持ちを明快に表現した銘文がある。

⑩ 銘文Rも相似た内容である。

⑪ 王莽の政治理念をあらわした銘文には、  
唯始建国二年新家尊 詔書□大多恩 賈人事市不財當田 更作辟離  
治校官 五穀成熟天下安 有知之士得蒙恩 宜官秩 葆子孫  
新興辟離建明堂 然于拳士列侯王 將軍令尹民所行 諸生万舍在北

方  
などもある。

## 七 結 語

個々の鏡式の型式分類することから始め、鏡式間の併行関係、年代を推定し、前漢鏡の編年を組立てた。本稿の目的の

第一は、こうした前漢代全般にわたる鏡の体系的な編年の方法を提示し、実施することにあつた。そして単なる編年にとどまらず、第二に鏡を文化史のなかに位置づける様式的理解をめざして、前漢鏡を大きく四期に区分し、文様と銘文について分析をおこなつた。最後にそれをまとめ、結語としたい。

第一期は、龍が抽象化した蟠螭文を主文とする蟠螭文鏡を中心とする。文様に戦国鏡の伝統を濃厚にとどめ、分布の中心は華南地方に偏る。前漢前期に相当する時期である。

第二期は、戦国鏡の伝統から脱した、植物文様をモチーフとする草葉文鏡の出現を画期とする。第一期の蟠螭文鏡からも文様の異なる三系統の鏡が生みだされ、鏡式の多様化がすすんだ。しかも鏡の地方色が消失して全土に拡がりをみせ、現実的な快楽を求める銘文が流行する。このような様相は、前漢中期の活力ある社会情勢を反映するものである。

第三期は、銘文と幾何学的文様を主とする清楚な異体字銘帯鏡の出現を画期とする。第二期とは一転して、鏡式の多様性と変化に乏しくなり、銘文も『楚辭』の表現を承けて哀調を帯び、正義に立つ者の受難を訴えた、悲哀にあふれた内容となる。

第四期は、細線表現の写実的な動物文をもつ装飾性豊かな方格規矩四神鏡や獸帯鏡の出現を画期とする。ほかに虺龍文鏡や異体字銘帯鏡が併存し、鏡式が再び豊富になる。この文様の新機軸と鏡式の多様化に加えて、現実の快楽を求める銘文が流行し、第三期を否定し、はるかに第二期を受け継ぐ姿勢をみせる。まもなく神仙思想や儒教的教義を中心とする銘文にかわり、王莽代に相当する第四期末になると、政治理念を表現した銘文があらわれ、また文様が定型化する。

文様や銘文の分析から前漢鏡各時期の様式上の特色を以上のようにまとめてみると、それは決して単調な一方向の変化ではなく、二転三転する劇的な運動を示していることに気づくであろう。個々の鏡式をとってみれば、総じて連続的な文様の変化を示しているが、全体を通してみた場合、新しい意匠の創出と、全く対照的な内容の銘文に交替することによって、五〇年余りの周期でダイナミックに変化しているのがわかる。この変化の激しさは、人々が日常的に利用した鏡に積

極的に新しさを求めた結果であり、前漢代における社会の活発な意識の運動を反映したものと考えられる。このことは、殷周時代の支配階層が独占的に用い、ゆるやかな型式変化をたどった青銅彝器と異なる、漢鏡の際立った性格をあらわすものとして注意されるとともに、漢代の一部の階層に限らない、より広い社会の意識思潮を遺物の面から検討する糸口を見出しえたことを意味するものである。

挿 図 目 録

- 図一 四葉文 a<sub>1</sub> 京大三二一一二  
 四葉文 a<sub>2</sub> 〈岩窟〉二上―四五  
 四葉文 b 京大五〇六〇  
 四葉文 c 京大四七二六  
 四葉文 d 京大五〇六一  
 連蘇鈕 a 〈樋口古鏡〉二五―五〇  
 連蘇鈕 b 京大四七二七  
 連蘇鈕 c 〈樋口古鏡〉二四―四八  
 連珠文 京大一九三〇  
 連弧文 〈岩窟〉二上―五五  
 輻射文 a 京大四七七三  
 輻射文 b 京大一二二六  
 乳帶文 〈樋口古鏡〉五一―九九  
 十二支文 a 〈守屋〉二九  
 十二支文 b 〈守屋〉二四
- 図二 素文 a 〈精華〉四三  
 素文 b 〈桃陰〉一二  
 四弁文 a 〈樋口古鏡〉一二―二三  
 四弁文 b 〈岩窟〉二上―三三
- 図三 四弁文 c 〈樋口古鏡〉二二―四四  
 a 〈書道全集〉二〇  
 b 〈四川〉二〇  
 c 〈書道全集〉二二  
 d 〈書道全集〉二五  
 e 〈小校〉一六一―三三  
 f 福岡県立岩一〇号魏棺出土 第六章注⑩第一九一図  
 g 福岡県立岩三五号魏棺出土 第六章注⑩第一九五図  
 h 福岡県立岩一〇号魏棺出土 第六章注⑩第一八九図  
 i 京大四七二六  
 j 〈書道全集〉二七  
 k 〈書道全集〉三〇  
 l 〈古鏡図録〉中―三三
- 図四 a 北京大学一四九  
 b 京大三一四五
- 図六 1 〈精華〉三六  
 2 湖南長沙馬王堆一号墓出土 第三章注⑦図版一七八  
 3 〈精華〉三四
- 図七 1 〈漢以前〉二七―四  
 2 〈漢以前〉二六―三  
 3 〈精華〉三三



- 図八 4 <樋口古鏡> 一三一—二六  
 1 四川成都羊子山一五七号墓出土 <四川> 二〇  
 2 河北滿城一号墓出土 第三章注⑧ 圖五四  
 3 京大五〇六〇

- 図九 1 天理大学付属天理参考館『中国古代の鏡』(天理、一九七五年) 図版九  
 2 <樋口古鏡> 一四—二七  
 3 京大二六三四  
 4 梅原末治『古鏡図鑑』(黒川古文化研究所収蔵品図録第一冊、京都、一九五一年) 図版二二

- 6 <桃陰> 二  
 5 京大四七二七  
 4 <鏡考> 下一二二  
 3 京大一九三〇  
 2 <古鏡図録> 中—四

- 図一〇 1 <鏡考> 下一五  
 2 <古鏡図録> 中—四  
 3 京大一九三〇  
 4 <鏡考> 下一二二  
 5 <小校> 一五一—〇三  
 6 北朝鮮ヒョニャン石塔里二二二号墓出土 梅原考古資料二三

- 三  
 図一一 1 <鏡考> 下一四  
 2 <古鏡図録> 中—二三  
 3 <古鏡図録> 中—六  
 4 京大一九九六  
 2 湖南長沙出土 湖南省博物館『漢鏡』  
 3 広東広州五〇三六号墓出土 第三章注⑩ 圖二七六  
 4 <古鏡図録> 中—二三

- 図一二 1 京大四七二六

- 2 <小校> 一六一—五六  
 3 <小校> 一五一—二一  
 4 河南洛陽姚溝一〇〇五号墓出土 第一章注⑧ 圖七一

- 5 京大四八四一  
 6 <小校> 一六一—五九

なお、京都大学文学部および北京大学蔵品の図は筆者が作成したものであり、その蔵品番号を記した。また書物の略号は次の通りである。

<漢以前> 梅原末治『漢以前の古鏡の研究』(東方文化学院京都研究所研究報告) 第六冊、京都、一九三五年)

<岩窟> 梁上椿『岩窟藏鏡』(北京、一九四〇—四二年)  
 <古鏡図録> 羅振玉『古鏡図録』(一九一六年)

<書道全集> 『書道全集』第二卷(東京、一九五八年)  
 <小校> 劉休智『小校経閣金文拓本』(一九三五年)

<精華> 梅原末治『欧米蒐儲支那古銅精華』鏡鑑部一(京都、一九三三年)  
 <桃陰> 梅原末治『桃陰廬和漢古鏡図録』(京都、一九二五年)

<鏡考> 陳介祺『鏡考藏鏡』(一九二五年)  
 <守屋> 鈴木博司『守屋孝蔵蒐集 方格規矩四神鏡図録』(京都、一九二五年)

[謝辞] 本稿は京都大学大学院に提出した昭和五八年度修士論文の一部を書き改めたものである。本稿の作成にあたっては、小野山節先生から御指導をいただいた。また樋口隆康先生には多くの御助言と貴重な資料の提供を受け、林巴奈夫、齋偉超、田中琢、佐原真、小南一郎の各先生、岡内三真、宇野隆夫両氏

をはじめとする考古学研究室の諸氏、ならびに金文研究会の諸兄には多くの御世話と御教示を得た。記して深甚の謝意を表します。

(京都大学大学院生



)

## The Chronology and Style of Earlier Han's Mirrors

by

Hidenori Okamura

Mirrors of Han age are very useful for study of chronology, for they have various designs and inscriptions. So, in this paper, I try to make a new model of chronology of early Han's mirrors with classifying each nine types of them in more detailed category and studying the relation of different type mirrors. For my new model we have 4 periods: in the first period there are mainly Pan-chi 蟠螭 design mirror which follows mirrors of the Warring states age, in the second Cao-ye 草葉 design mirrors with plants designs, in the third Inscription 異体字銘帶 mirror mainly with geometrical designs, and in the fourth Fang-ge-gui-ju-si-shen 方格規矩四神 mirror with realistical animal designs. Next I clarify that the meaning which inscriptions declare changes as assemblages of types and elements of design do so. In the above I grasp the change of designs and inscriptions totally and assign the early Han's mirrors in the cultural history of Han.

## The Historical Role of the Local Monetary Currency in the Early Modern Ages

—A Case of Kaga-Han 加賀藩—

by

Setsuko Nakano

In this paper the author tries to examine the monetary policy and its background of the feudal silver within the early feudal currency of Kaga-Han. She clarifies them as follows:

1. Kaga-Han's monetary policy of the feudal silver had developed since the middle Genna 元和 Period, and it was established in the 15th year of the Kan'ei 寬永 Period when the rule of the unifying circulation of